ふじみの

No. 18 1979
東京農大畜友会

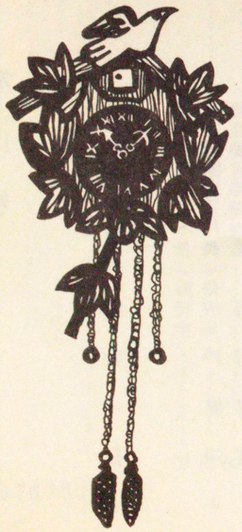
巻頭言

畜友会委員長　榎　本　一　弥

思えば早いものである。辛く苦しく、日一日が長くすら感ぜられたこの二年間も、既に過去のものとなった今、役員として過ごした日々が、まるで夢の中の出来事のようであり、すべてのことが無かったようにすら思える。

鑑みるに、私は一体何が出来たのであろうか……。私にはわからない。私の人生、あるいは農大全体からすれば、この二年間というものは、それこそ海に小石を落した程度にしか過ぎないのかも知れない。そして、その余韻の輪も、時間という波によって、人々の心の中から抹殺され、やがては、私の心の中だけに生き続けていく。

だが、すべての人達の心の中に、永遠に生き続けて欲しいものがある。それは「素晴しき友情と母校愛」である。



表紙の言葉

生き物の表情は美しい。

畜産2年　小　原　英　嗣

ふじみの　第18号

目次

巻頭言 …… 畜友会委員長　榎本一弥　1

御一報
「ダヒルサヨ」…… 畜産学科長　一戸健司　4
畜産をどう見直すか …… 教授　吉村喜彦　7
海外雑感二件 …… 教授　鈴木正三　8
アンゴラ・フィーバー …… 助教授　伊藤澄麿　10

厚木農場より
小岩井農場の思い出 …… 農場講師　西脇充　15
日本の最南北端 …… 農場講師　大谷忠　17

紀行文
かいま見た中国の畜産 …… 助教授　石島芳郎　19
フィリピンへの旅 ― 南の島でミミズを追って ― …… 副手　伊藤晶啓　26
夏期北海道行 …… 29

photo
夏鳥に添えて …… 農大野鳥の会　33

詩・随想
私と私と私 …… 畜産一年　瑠璃運　37
子供の反乱 …… 畜産三年　根石吉市　40
我が子よ …… 畜産二年　内山たま美　41
ランボーについての小研究 …… 畜産三年　根石吉市　42
風が吹いて …… 畜産二年　伊藤達美　43
独りの朝 …… 畜産二年　内山たま美　44
「師」と思う心 …… 一寸法師　45

主張
複雑怪奇なる表現 …… 畜産二年　46

話・話・話
丈夫な歯ブラシ …… 畜産一年　磯田芳男　49
ヘラブナ釣り …… 畜産四年　M・N　50
序章 …… 畜産三年　福島康人　51

DRAWING
畜産二年　宇野仰　54

研究室だより
昭和五十三年度卒業論文題目
○家畜育種学研究室 …… 59
○家畜生理学研究室 …… 60
○家畜繁殖学研究室 …… 61
○家畜飼養学研究室 …… 63
○家畜衛生学研究室 …… 67
○畜産経営学研究室 …… 69
○畜産物利用学（肉）研究室 …… 71
○畜産物利用学（乳）研究室 …… 72

畜友会だより
昭和五十三年度畜友会行事報告 …… 74
昭和五十三年度畜友会会計報告 …… 75
畜友会規約 …… 76
編集後記 …… 80

御一報

「ダヒルサヨ」

畜産学科長　一戸健司

現在我が国では、フィリピンの観光がブームを呼んでいる。確かに、東京から僅か四時間半の飛行で椰子の葉蔭に映るマニラ湾の夕焼けに接する事が出来、他の東南アジアの国々とは違い流暢な英語で同国が包まれているとあらば欧米諸国に行かずとも身近に外国旅行は満喫出来る。フィリピン人は日本人とみると片言の日本語を交えて笑顔で接近して来る。ホテルのレストランやバーでは、「こゝに幸あり」を日本語で歌っている。セブー島をはじめとして、多くのスペイン統治下の遺跡が私達を楽しませてくれる。或る種の優越観と外遊気分が我々を満たしてくれるとあらば、フィリピンこそ手軽に得られるパラダイスと言えよう。この国を素通りした人々には、まさにこの様に映るであろう。

私は幸か不幸か、未だフィリピンの人々がこの様に開眼する前、即ち一九六七年に初めて渡航する機会を得た。当時は勿論ビザがなくては入国は出来ず、その上ビザを入手する為には先方からの招待状が必要であるという念の入れ方であった。マニラでは日本人に会う機会は殆んどなく、子供達は総べて跳であった。私達は野鶏を求め、フィリピン大学のバンチョー教授の案内でパラワン、ミンダナオ、セブーの島々を歴訪したが、何処でも日本人は物珍らしく特にパラワン農科大学では戦後初めて会った日本人として私を歓迎した。クリスマスパーティーで踊ったダンスが動機となり（彼等は日本人がダンスを踊る等とは夢にも思っていなかったので）、その晩パラオ学長は初めて胸襟を開

いてくれた。彼等は戦時中に受けた傷跡があまりにも大なるため、今なお日本人を心から警戒しているとのこと。そして彼等が日本人を見て思わず口ずさんだ「見よ東海の空明けて……」のメロディーは、戦争が彼等の胸中に今なお残っている何よりの証拠であった。又ミンダナオ島のバスの中では折角隣の乗客と英語で話していたのに、ふとした同行者の不注意から私が日本人だと言う事が判ってしまった。途端に乗客一同は何んとも言えぬ冷やかな眼差しで私を見つめ、バス全体が窒息しそうな空気に包まれてしまった。私はひしひしと身の危険を感じ、たゞ時が経って無事目的地に着く事のみを願い続けた。海上には多くの日本の軍艦が座礁したまゝその残骸をさらしていた。日本ではとうに忘れ去っていた戦傷が、この国では厳然として残っていたのだ。

それから八年を経過した一九七五年、私は再度フィリピンを訪れる機会を得た。総てが驚く程変っていた。彼等は日本人にむしろ好意的な眼差しで接する様になっていた。僅かに八年間で何故こうも変ったのかと私には半ば信じられなかったが、何日間か彼等と生活を共にする内に総てが判って来た。彼等にとっては、日本人は目下のところ最高によいお客さんなのである。金は惜みなくよく落すし、その上語学力は桁外れに劣っている。まさに彼等にとってはお誂え向きの客である。彼等は持ち前の陽気さで接して来る。

パラワン島では、今迄ヴェールに閉ざされていた暗い過去の置き土産が回を重ねるに連れて次第に私達の前に明らかにされて来た。一昨年の渡航時には「私の祖父は日本の軍人であった」とその名前迄告げる女子学生が出現したり、昨年の渡航時にはバスを待っていた中年の男が私達の姿を見ると駆け寄り、片言の日本語を交え「私は戦時中この島で日本軍の通訳として働いていた。アメリカ軍が上陸して来た時に私は足に銃弾を受けた。これがその時の傷跡である。私は捕虜となって五年間この島の獄舎で服役した。お前達と二、三日一緒にいれば日本語はきっと元に戻るだろう。」と話してくれた。一見何気なく取り交わされた会話ではあるが、これらの現実が何れも敗戦色の濃い日本人の

軍人が食うや食わずの生活の中で実施した当時の置き土産だと思うと、思わず背筋の寒くなるのを感ずる。

私が初めてフィリピンを訪れた時にパラオ学長からタガログ語で教わった民謡「ダヒルサヨ」だけは、今も変らず彼等の間で歌い続けられている。戦時中我が国でも数少ない外国の歌として、ダヒルサヨやサンパギータが歌われていたのを私は覚えている。おそらく日本軍が彼等に強要した軍歌の返礼として彼等が歌ったこれらの民謡が、南進日本のシンボルとして我が国に逆輸入され、これが流行したのであろう。従って彼等が戦前、戦後を通じて歌い続けて来たこれらの歌には、きっと深い深い思いが込められているに違いない。

私達はフィリピンへの渡航の回を重ねる毎に、ダヒルサヨを日本語、英語、ダガログ語と次第に彼等の心にふれる様進展させて歌い続けて来た。そして彼等は私達を友として迎え、一方日本の歌や武道を歓迎し楽しい一時を過す事が出来た。

マニラやセブーに氾濫する日本の観光客、彼等がごあいそうに片言の日本語を話すのをよい事にして、義理にも上品とは言えない日本語を彼等に教え、一方英語が話せない弱点を金の力で解決しようとしている。兎に角眉をひそめたくなる光景に数多く遭遇する。

私は諸君にお願いしたい。外地に出た場合には先ず彼等がどんな概念を真にいだいているか把握して欲しい。そして次にどんな事態に対処しても驚かない腹をすえ、とことん迄彼等と然も笑顔で話し合って欲しいと。

マニラのホテルできいた「ダヒルサヨ」もパラワン島の田舎町アボランの大学できいた「ダヒルサヨ」も歌自体には変りがなかろう。然し歌っている人の心には格段の相違がある。私はこの歌を一人で口ずさむ時、得も言えぬ複雑な気持に襲われるのが常である。

畜産をどう見直すか

教授　吉村喜彦

日本人の動物性たん白質の消費量は、肉類6.7、鶏卵5.1、牛乳・乳製品4.0＝計15.8Kg、魚貝類16.0Kg（以上一九七二年農林水産統計）計31.8Kgとなっている。この数字が示すように、畜産物と魚貝類とが半々であることは注目に値する。

昨年来、世界諸国が二〇〇カイリ漁業専管水域を相いついで実施し、日本の漁業界は、漁獲量の大幅な削減をみるに至った。このような情勢からみて、日本人の動物たん白の供給バランスは、今迄の畜産物半分、魚貝類半分がくずれて、畜産物の方にウエイトが掛ってくることは避け難いと思われるのである。

しかしながら、このような畜産物の見直しが、そのまま国内の畜産振興にストレートにつながっていくかどうかが問題として残る。

昨今やかましくいわれている牛肉を例にとってみるならば、日本の国内価格は、米国から肉牛を生体のままで空輸しても採算が合うほど国際価格に較べて割り高になっている。

消費者が安い牛肉を求める中で、米国からの牛肉・オレンジの攻勢、また、ニュージランドが沿岸二〇〇カイリ内での漁獲許可と畜産物の輸出をからませようとしている。これに対して、畜産農家は、将来の動物性たん白の安全確保のために国内生産を振興し、自給率をたかめるべきであるとしている。

しかし、飼料の大部分を海外に依存しているわが国に対して、飼料の輸出国は、飼料を輸入して畜産を推進するより、安い畜産物を輸入した方が有利ではないかという議論によって、畜産物をわが国に売りつけようとするし、また、この議論に賛成する国民も少なくない。このような考え方の相違は、今始ったことではなく、少なくとも経済成長期に入った頃より続いているのである。

問題は、畜産物の需給関係にあるのではなく、日本農業の在り方、畜産の在り方に求めねばならない。すなわち、いま日本農業の直面する農業問題の一つに、地力の減退という難題がある。それには、耕種と畜産の結びついた新しい有畜産農業に農業の構造改善をやらねばならない。そのためには、小中規模の飼育農業を助成し、厩肥の土地還元、自給飼料の増産（稲作転換の一つ）によって土地の有効利用を計るという農政の一大転換がなされねばならない時機に直面しているのである。

海外雑感二件

教授　鈴木正三

今夏、機を得てレーニングラードの国際学会に出席し、帰途愛着離れ難いアルプスのユングフラウヨッホへ足を伸した。

国際学会の内容は筆者の専門分野に亘るのでそれは別としてこゝに世界各国から集った学者・研究者はそれぞれ主義主張の異る国柄の者で文字通りバラエテーに富んだ集合体である。従って当然のことながら意見・考えの相違のあることは極めて自然のことであり、寧ろ所謂同形色に律するという考え方自体が不自然といってよい。大別して明々白々なカラーで分類するとまず三つになる。すなわち自由圏・共産圏および半共産圏である。

日常見る新聞紙は規模の大小は別としても絶えざる政党派閥間、信奉宗教間、民族人種間における闘争とトラブルで色どられ実に賑やかである。人類には平和というものはなく、人と人との抗争の連続の歴史がある。平和とは闘争と闘争、戦争と戦争との間の暫定的休憩時である。そしてこの時代に闘争が基因となって科学・文化が創造され進展するとか。戦時に聞いた誰れかの主張である。確かに一理ある見解かも知れない。こんなことを胸に秘めて思い出の国、総てに自由奔放な国から閉鎖統制の国に旅した。

旧知のソ連科学アカデミーのシベリア支部の遺伝育種部長のチエコノフ博士夫妻、長男の三人でまず温かく迎えてくれた。この人はわが農大にもかつて来て講演を願ったこともあり、筆者とはソ連の学者のうちで最も親交の間柄であり、常に学問の世界で連絡を密にしている人であるだけに文字通り水入らずの歓待を受けた。その外のソ連の学者にも彼により紹介され特別の好意と待遇を受けた。筆者の八月十八日の学会総会終了時でのソ連国営放送記者とのインタビューも、その夜のソ連農林省主催の正式晩餐会での挨拶にしても何故数多くの出席者の中から筆者のみを限定したのか不思議でならないが、結局日本とソ連との今後の強力な学術提携によって東アジア地域の畜産開発を推進すべきであるという記者の意向からの現象ではなかろうかと勝手に推察している。自由圏は勿論、半共産圏の学者も大体一ケ国には一人、二人の知友をもつ筆者には彼等との学問の世界には壁はない

という理念の現れが学会開催中毎日のように経験し、洋の東西を問わず真理を求め学問に忠実に生きる者達には混然一体・協力体制下、決して新聞紙上に見るが如き波高き現象はなく実に有難い事象である。そして過去数回出席した国際学会での経験から、特に明白な共産国家のソ連の学者達もそれを望んでいることを痛感しわが意を得たりの心境を確認した次第である。

第二にバリパスツール研究所を廻り、これまでわが家畜育種学研究室の学生が毎年一名づつお世話になっているスイスのベルン大学家畜育種学教室のウイバー教授を訪ねた。教授はこれまた一九六二年来の親交の間柄があるので、筆者の家族一同を自宅に招待して呉れ、再会の喜びを分ち合った。教授は筆者と同様に山好きの学者である。翌日直ちに過去に行動を共にしたユングフラウの山行きを再度計画して実行したが今回は時間の都合上ユングフラウヨッホまで行き引き返した次第。こゝで感じたことはヨッホ周辺の山小屋には到るところ漢字で、日本語で名前を書き、中には落着きとも思われる日本語が見られたことは何んとも言い知れぬ感情に支配され、山の尊厳さを知らぬ単なる観光客とはいい恥入った次第である。勿論外国人の横文字で書かれたものもあるので、書く人の心情はよく諒解出来る。一生の記念に日本からはるばる遠くこゝまで来た記念は充分諒解出来るが余りにもその程度が真面目さを欠き、むしろ汚らしく見えてならなかった。一九六二年には余り目立たぬ日本人名であったが、今回はまるで日本人の署名の優越感というような仕ぐさでさえ感じられ恥入って痛感した次第である。日本人の清純な山に対する観念を問いたい。今後も益々こゝでの日本語は目立って来ると思うが各自の山に対する良識以外に訴えるすべはない。楽しかるべき山行きが不愉快な思い出となってしまった。

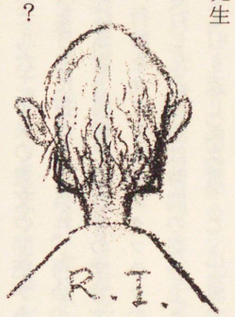
（一九七八・一一・五）

アンゴラ・フィーバー

（都民が兎に振りまわされた日）

助教授　伊藤澄麿

R・I・研のイナバ先生の頭がよく茂り、乳研の山中先生が未だ紙芝居の水アメに魂をとかし込み、筆者が紅顔の美少年の頃でしたでしょうか？

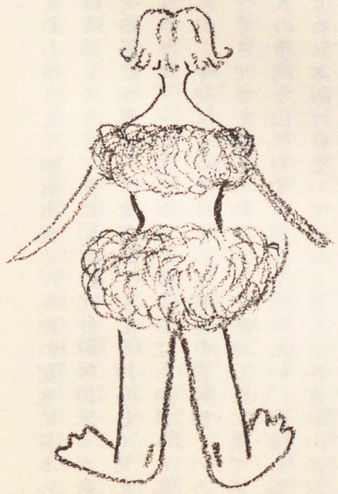


世の中は未だ戦の嗅いが方々に残っていました。動物園の猛獣舎は豚と山羊の小舎であり、国鉄の駅前ではD・D・T混入の白い粉（虱退治用）を全身に振りかけられ、東京のほとんど全部の地域が焼土となり、ブタ草や荒地野菊に被れていました。

人々は常時飢餓状態であり近江俊郎の歌う「湯の街エレジー」だけが乾いた耳に響いていました。そしてアルゼンチンのペロン大統領からもらったデントコーンとララ物資（難民救済用物資）でわずかに餓死はまぬがれていました。

一～二年経た或る日、突然米国政府よりそのツケが廻って来た訳です。もち論米ドルも金塊もない日本政府のフトコロを見込してのツケのようでした。日本で生活出来るもので支払えという訳です、その中に問題の兎の毛があったのです。

米国の或るデザイナーがその年新型女性用海水着として上下セパレートの水着を発表した訳けです。女性が公衆の面前で臍を出していいものか否か？　盲腸のキズは？　等々世の中大騒ぎ、そしてマチエルには「アンゴラ兎の毛の混入されたもの」とありました。即ちその頃アトミック・ボンバを南太平洋ビキニ環礁で実験して世界中を恐怖にたたき込んだ米軍の実力に悪乗りしてか、肉体美のモデルをアトミック・ガール水着をビキニ型と名



ずけたのです。局部をわずかに被う柔かく、フサフサモヤモヤしたキノコ雲型のグラマーが世界中のビーチに出現しそうになったのです。

そのミソとなるべきアンゴラ兎毛は、米国はもとより日本に於ても極めて少く、とても要求量を満たしきれずさりとて食物のツケは払わなければならず、農林省が音頭をとり大増殖計画となりました。

それまでは兎は全く農家の副業としてのみ存在したわけで、それも軍用、防寒毛皮、もしくはソーセージ、粘着剤としか使いみちがなかったのです。従って毛の長さ1・5インチ～3インチなんて云う長毛種はごく僅か長野県や福島県の一部で飼育されていただけです。ほとんどが白色在来種か一部の有色種と僅かの短毛種のレッキス種だけでした。

世の中、食物、着物、寝る所、何もない時とても、ペットだ、オシャレだ、の騒ぎではないのですが、しかしながら一面焼野ケ原の東京草資源は無限と考えられました。

新聞、ラジオは連日「アンゴラ兎を飼いましょう」と書きたてます。いやが上にも兎ブームは暑くなりました。

需用が高まれば価格が上る。従来一匁（3.75g）50～60銭の兎の毛が1円になり2円となり20円を越しました。

お役所の唱い文句は「そもそも、アンゴラ兎とは英国系とカナダ系があり、英国ロイヤル系は全身耳の先まで良質な綿毛で被れ刺毛が少く、カナダ系は刺毛が多くやや粗剛であるが、産毛量は多く雄兎は年間4回セン毛すれば、100匁以上、雌に於ても80匁は採毛出来る」とありました。又「採毛后は肉として用い毛革は手袋、衣料として最高級」とありました。全く当時として又とない福音でありました。

一匁20円、年間一頭当り産毛量100匁、従って年間粗収益2000円、これは一般世の中も畜産界もだまって見過す訳にはいきません。（当時東京農業大学予科の授業料が年間3000円から6000円になり大もめのときであり教授の月給が5000円～6000円位？）

そして兎とネズミは親戚ですから文字通りネズミ算的に殖えるから三年もすると巨万の富となると云う計画でした。

だが然し肝腎のアンゴラの種兎の数が少く、東京都等で頒布会を開いてもとても間に合うものではないのです。

丁度その頃、それらの問題を解決すべく「全日本アンゴラ農業協同組合」（以下全アン）が設立され、新宿カブキ町のド真中に大看板が上ったのでした。

そして或る日頒布会を行う事となりました。場所は日本橋白木屋一階（現東急百貨店）、当時研究会の最下級生の筆者も先輩諸兄に狩り出されて、手伝いに出かけました。初日、開店朝10時、9時に集合させられた私達の見たものは、文字通りの長蛇の列。入口に先頭がいて日本橋の角から永代橋へ向い途中から兜町へ曲り又銀座通りに向い日本橋の角へ、そして又永代通りへ……そして又……要するに東急デパートの廻りを幾まわりもする人の列です。手に手に篭や箱をぶら下げた、アンゴラ購入希望者なのです。

やがて開店、そして仔兎が長野から到着して販売開始、届いた仔兎は200～300頭、要求者は数万、どうすれあいいのだ。

兎は生後一ケ月以内位で無理やり離乳したものばかり。すでに輸送中に昇天しているものもあり、ほとんどはフラフラの態、生死の境をさまよっています。

仔兎の質はと思って見るとアンゴラあり、顔は白兎で背中の長さが一寸長いアンゴラもどき（多分日本白色在来種とのF1）あり、で種々雑多、それが先頭から二三百人の人にアッと云う間に行き渡ったのです。おさまらないのが残りの群衆、「三日前からここで待っていたのにどうして呉れる」

「又明日売ります」

「整理券を出せ」、こんなヤリ取りが阿鼻叫喚の中であり、終った時は夕暮れでした。

そして次の日も、次の日も……

一週間が終り、レジの中は札が舞っていました。死にそうな仔兎一匹2000円、親兎1万円なのですから。デパートの一階フロアは高級品を売る所、けっして亀の子ダワシ等がない所です。そこへアンゴラ兎毛の製品が並んだのです。モデルは女優の木暮実千代、真白でフワフワ、モヤモヤしたセーターに身を包んだこの人の美しさと香しさ（安物の合成ヘリオトロープが流行でした）に皆身を振わした事と思います。群衆は、ヨレヨレ、ベタベタ

なのですから。しかし1Fの高級品を売っている所のお嬢様方は別。二、三日もすると「良家の子弟は良家の子弟」とばかり我が農大の先輩諸兄とごく親密の間柄になった事もつけ加えましょう。

そしてこの会は長野県へ巨万の富を送り込み、世の中にアンゴラ兎の存在を示し、終りました。しかしこのフィーバーは止まる所を知らず、遂に米国極東空軍が出動してカナダから種兎を輸入すると云う事が起きました。冬の或る日羽田へ着いたロッキード・コンステレーションの中から数百の本物のフランス系の血を引くカナダ種兎がとび出して来たのです。

これからの種兎は全アンの飼育場へ収容されたのです。世田谷通りを下り多摩川の右手前へ大きな養兎場が出来上りました。それは壮観そのものでありました。前面の多摩川堤の青草は無限であり、空気は清浄、設備は最高世界のアンゴラ養兎の中心となったかに見えました。

実際兎を飼って見ると色々問題が出て来ます。草の食性は広いと云われますが焼跡のキク科やアメリカアリタ草等は喰わないし、ヤブカラシ、タケニグサに中毒すれば直ちに死ぬし、要求率は1対10以上だし意外に難かしい問題がありました。又、スピロヘーターの伝染も多くそれが人に移行するや否や？　色々物議を醸したのです。

青草も無限と思われた、多摩堤も一回の花火大会と多数のアベックの散歩道のカーペットとなり使用不能となりました。秋風が立つ頃全く突然このフィーバーが終りました。「アメリカの流行が終ったから」只それだけでした。そして20数円にまで上った兎毛価格も一円を割り80銭位となり、農大北門辺の農家で多数飼育していた兎は一匹もいなくなりました。「アンゴラは毛の管理が面倒でだめ」「肉は少くてだめ」「皮は毛刈りの際のハサミ傷で穴だらけ」。

「アンゴラの毛は中が空洞だから保温力抜群、混紡品は神経痛・リューマチス症に良し」といわれたフラフラモヤモヤが抜け出したら止らず、もし木暮女史が電車にのればまわりの人が皆糸屑だらけかゼンソクになる事でしたでしょう。要するに毛の特性を知らず紡毛技術もない時ですから着物としてダメ。要するに皆ダメになったのです。一瞬のフィーバーでした。

そして三十年近い今、北風の吹く歩行者天国のある日日本橋で大道香具師が仔兎を売っていました。

「テーブル兎だよ、大きくならないよ。名前呼べば走って来るよ、2000円安いよ。」

二十数年前の日何かザビエルクガーの太鼓の音が響いていたはず。しかし今流れている曲は「ソンブラー・ナ

ダマス」（影だけ）
「君の呉れるもの、それは君の影だけだ、中身はどこなんだ」と。

おわり

厚木農場だより

小岩井農場の思い出

農場講師　西脇　充

「小岩井農場」は明治二十四年に日本鉄道会社副社長小野義真、三菱社社長岩崎弥之助、鉄道庁長官井上勝の三氏による共同開発した我が国最大の民間農場である。名の由来は各々の頭文字から成り立っている。当農場は岩手県盛岡市の西北、岩手山の南麓に位置し、その標高は二〇〇～六三〇m程である。またその地形は、南北に約一五km、東西約五km、周位は約三五kmを有し、その面積は約二六〇〇haを有し、国電山手線の内面積と同様と云われている。

この農場に私は同期入社の三名と昭和四十一年三月三十日上野から夜行列車で一路「盛岡」に向かった。翌三十一日朝七時頃盛岡駅に到着。ホームに出たとたん雪の大歓迎を受けた。盛岡駅で橋場線（現田沢湖線）に乗り換え小岩井駅下車、そこからバスにて農場に行ったが、まだ雪は降りつづいていた。一〇cm程積ったと記憶している。先ず最初に農場長に赴任の挨拶をした後、三人はそれぞれ配属先に行く。私の配属は種鶏部である。その事務所に行き、当時部長であった川口氏から部の概況の説明を受けた。その川口氏は私の退職する一年前に逝去されたが、写真を趣味とし、なかなかの芸術家であり「光陽」という名で数多くの写真展に出品していた。私は川口氏から数多く写真を撮つして頂き、今では小岩井での思い出として大切に保管している。去年お線香をあげる機会が有り、昔を思い出し氏の御冥福を祈った。

農場種鶏部に在職中、先ず最初に孵卵関係に配属された。当初頭を痛めたのは検卵（入卵後五日目）作業である。上司から受精卵、中止卵及び無精卵の見分け方（受精卵：胚からの血液脈管を確認）の説明を受けたのち、実際に検卵を行なったが、ベテラン諸氏に比べて、その検卵する時間は可成り遅かった。しかし二～三ヶ月もすると、見分け方も、卵黄の位置（受精卵：下部の方にある）を確認することにより、先輩諸氏と同等に手際よく出来る迄になった。次に雛の発生時における燻蒸消毒及び孵卵機の操作である。燻蒸消毒は雛が五〇～六〇％発生した時にホルマリン2に対し過マンガン酸カリ1の割合で実施した（二十分間程孵卵機を密閉し消毒、その後、入、排気孔開け少量のアンモニア水で孵卵機内の中和を

行なう）。その後雛が発生しているので、孵卵機内の温度が高くなり、入、排気孔の操作を誤まると、雛は高温のためムレにより大量斃死することがある。又孵卵機一台ごと発生時刻も異なるために、雛発生時の宿直に当った時は徹夜を覚悟したものだった。

次に育成に配属された。育成の成功は養鶏経営の八〇％成功させると云われており、育成期の管理は鶏の一生を通じ大切な時期である。当農場は、育成舎及び成鶏舎とも無窓鶏舎により飼養していた。今では無窓鶏舎について多くの資料があるが、その頃はその資料もあまりなく、私は実際に無窓鶏舎の管理を行いながら勉強して行った。無窓鶏舎の特徴は、人為的に鶏の最適環境を作る事により、その最適能力が発揮出来る様に飼養することである。無窓鶏舎の管理で大切なことは室内の温度及び換気であった。これは断熱材、入気及び排気の方法により異なる。特に私は夏季の室内温度、又季節の変わり目の自動温度調節換気装置による室内温度の決め方で苦労した。この様に舎内の環境を管理するには、やはり鶏の生理を充分認識していなければならない。無窓鶏舎による飼養は、この点に注意しなければいけない。

次に検疫の思い出がある。諸船の事情で外国から雛を輸入することになった。本来なら横浜等の検疫所で行うのであるが、当農場は隔離牛舎を改造して検疫場所として申請した所、許可が出たのである。そこで私は十一月～二月頃までの間、四、五回この雛の管理をするはめになった。鶏の検疫期間は十四日間であり、その場所から外出禁止である。

しかし食事をする施設がないために近くに牛関係の独身寮（徒歩で五分程）で食事をとるときだけ外出の許可があった。この検疫場所の宿直室は三畳の一室、便所も徒歩五分程の場所にあり、日常の生活は考えるとひどい環境であった。この様に一日三回の食事の時だけ、みんなと話す機会があったが、他の時間は私一人で雛相手の毎日であり、検疫の許可がおりる様な場所だから林の中の一棟屋、夜などは気味が悪くなってくる。この検疫により、私の育雛の技術は向上したが、二度と遣りたくない仕事であった。

この他色々な思い出があるが、何と云っても脳裏に焼きついているのは、岩手山の雄大さである。又四季により色々と岩手山の景色に変化があり、私に何か物語っている様である。農大農場に勤務してからは、岩手県に行く機会があった時は必ず小岩井農場に趣き岩手山を眺めるのが一番の楽しみである。

日本の最南北端

農場講師　大谷　忠

最近の学生諸君は、熱帯の草花がおい茂る沖縄や、白樺とスズランが美しい北海道を何の抵抗もなく気楽に旅行しているが、私の学生時代から比べると全くうらやましい限りである。しかし石垣島まで行っても、その先の日本の最南端である与那国島や、流氷で有名な最北端の稚内まで足を伸ばす者はあまりいないと思われる。そこで私が本年偶然にも、この極端に違う二つの地域におとずれたことから、あまり知られていないその地の農業について紹介してみよう。

先ず、与那国島は沖縄本島より五二〇㎞も離れ、かえって隣りの国、台湾に一七六㎞の近さに位置した小さな島である。島の気象が年平均気温二三、五度C、降水量約二〇〇〇㎜、高温多湿で気温の格差はなく、亜熱帯海洋性気候の特徴を示していることから、この島はまさに南国といえる。世界最大のヨナグニ蛾が生息していることで有名なこの地は、一般的に泡盛とサトウキビの島であることはあまり知られていない。六〇度以上の泡盛を醸造しているのはここだけらしく、その強さとうまさには私も驚かされた。サトウキビはこの島の重要な産業になっており、国や県の補助で土地改良を近代的に進め、日本各地からきている援農者などによりその増産を高めている。またこの地は他の島々に比べ、湧水が豊富で米作も適している。この米は総人口二二〇〇人を十分まかなう量を生産し、その他の野菜関係も自給自足で足りているようである。果物においては、沖縄本島と同様すべて輸入しており、ミカン、リンゴ等は大変高価なものとして扱われているようだ。魚類においては、近海で採れるアカマツを始め、サワラ、ハタがあり、淡水魚は久部良の湖でフナ、コイ、カンコ、ウナギが豊富に生息して、常に新鮮なものが食べられる。有孔虫のかけらでできた星の砂が、この海岸の砂浜にもみられ、その海辺から島の中心にかけ、小さい島の割に牧場が多く存在し、大小合わせると二五の牧場がある。そこには黒毛牛が約九〇〇頭、馬六一頭、山羊二一五頭、豚三二〇頭が飼育されている。またサトウキビ栽培や水田の使役牛として重宝がられている水牛は四九頭もおり、珍しいことに、昨年まではその育成牧場があった。しかし観光開発が進むにつれ、人間に危害を与えるとの心配から中止したという。一般的に水牛の肉は硬くてまずいといわれ、その肉の利用は、家畜として飼育している沖縄でも無視されているが、この与那国島だけは精肉として利用されている。また農家人口八〇〇人、農地面積七〇〇〇*ha*そこそこで、これだけの家畜を飼育できるのは、多量にあるサトウキビのバガス（残葉）や、南国特有の暖地型の牧草ネピアグラス、バンゴラグラス、ダリスグラス、ギニアグラス等が一年中生育しているからと思われる。

このように、太陽の恵みがいっぱいの沖縄県の離島与那国島の農家の人達は、明るく毎日の仕事に精を出している。

美しく晴れた海の遠方には台湾の山々が望見される。そして歴史的にも由緒ある名勝旧跡が多いこの島は、観光的にも十分面白味がある。島内には旅館、民宿が十四軒もあり、その部屋で泡盛を飲みながら、台湾放送のテレビを観るのも、又変った異国情緒が楽しめるはずである。

さて次に北の果て宗谷に飛んでみよう。東京から宗谷に行く最も楽な交通機関は、札幌経由で稚内空港に直行するＹＳ１１であろう。しかし濃霧が多発するこの地方は、時々欠航すると言うから、予定の日程で消化できた私は幸せで、急用の人、交通機関の乗り替えを要する人にはやはり不便な所である。

宗谷地域の産業は漁業、農業、林業の第一次産業と、それに関連する第二次産業が基幹をなしている。その中でも漁業の生産額が最も大きく、道内の蛋白供給基地として大きな役割を担っている。またこの地は広大な未利用土地資源の有効利用から、我が国最大の畜産物供給基地を形成し、その開発事業が促進されている。（資料・北海道開発局）

北海道には広大な面積を有した大規模草地牧場の団地が、いたるところに散在しているが、その一番はやはり十勝地域であり、次に日本中に知られた別海のパイロットファームがある根室地域、そして網走や釧路などがそれに次いでいる。しかし酪農振興を押し進めている宗谷地域は、年平均六・四度Ｃの寒冷地気象や強酸性の重粘土で、低地が泥炭の湿原地帯等の悪い条件にもかかわらず、その五番目に位置しているのはさすがである。さらにこの地域には日本一の牧場がある。日本一とは広さと飼養規模のことであるが、サロベツ原野の近くにある豊富町営牧場がそれで、その面積は一四一五*ha*、飼養頭数約三二〇〇頭の驚くべきものである。高台からみた景観ははてしなく牧野が続き、草をはむ乳牛の群れ以外はなにも見えない。しかしこの規模に感激している私を、開発局の職員が案内してくれた別の大規模草地牧場の予定地は、もっと驚くものであった。それは天北北部地域にあり、総面積一四八六〇*ha*、乳牛二〇〇〇頭、肉用牛（乳用雄牛）五六〇〇頭の飼養規模にする計画というから大変大型のものである。

現在、宗谷岬は観光地として有名であるが、反面これらの悪条件を克服して一大酪農大団地ができ上りつつあることや、それらの努力の中から、昨年の全道乳牛共進会で、宗谷郡猿払村から出品された乳牛、コバ・コマンダー、バーク・クリスタンがチャンピオンになり、名牛作りにも成功していることなどを知る人はあまりいないと思う。是非機会があったら、宗谷岬からソ連領サハリンをながめた後には、日本離れしたこの大型酪農地域まで足を伸ばし見学してもらいたい。きっとなにかの役に立つはずである。

紀行文

かいま見た中国の畜産

助教授　石　島　芳　郎

去る八月十九日から二週間、茨城大学中村亮八郎教授を団長とする日中友好獣医畜産関係者訪中団に参加し、北京、南京、上海、広州と四つの都市をまわってきた。今回の旅行は友好を立て前にした参観団ということもあって、専門分野だけの見学という訳にいかなかったが、人民公社三箇所、牧場一箇所および研究所二箇所の都合六箇所（表1）を通して畜産の一端を見ることができたので紹介しよう。

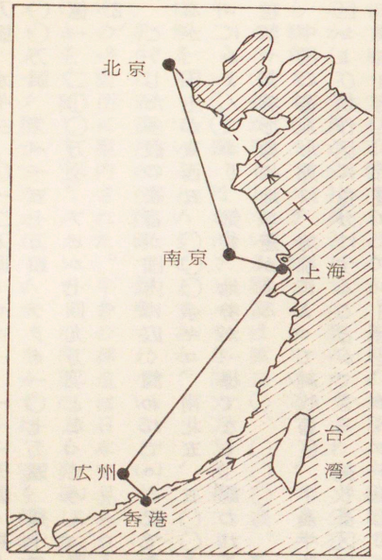


表1　畜産関係の訪問先

北京	和平中阿友好人民公社
南京	江蘇省農業科学院畜牧獣医研究所
上海	宝山県彭浦人民公社
	上海市牛乳公司第七牧場
	上海市農業科学院畜牧獣医研究所
広州	南海県平州人民公社

ご存知のように、中国は、日本の二十六倍にもおよぶ広大な国土に、九億に近い民をかかえている。しかもその八〇％が農民といわれる。そこに飼われる家畜はおのずから数も多く、総頭数でみたらおそらく、世界中で飼われる数の三分の一は中国にいる勘定になろう。飼養される家畜の種類も、馬、ロバ、ラバ、牛、ヤク、水牛、ラクダ、豚、山羊、羊、鶏、アヒル、ガチョウ、シチメンチョウと豊富で、まさに畜産大国である。

家畜の飼養頭数は、正確に把握するのが困難であるが、最近のＦＡＯの統計によれば、豚二億三、八三二万頭、牛六、四六〇万頭、羊七、四五〇万頭、山羊六、〇六九

万頭、水牛三、〇一二万頭、ロバ一、一七一万頭、馬七〇〇万頭、ラバ一五七万頭、ラクダ一〇七万頭、鶏十三億一、二〇〇万羽、アヒル七四九万羽となっている（表2）。

こうした多数の家畜が国内に広く飼われている訳であるが、国土が東西五、〇〇〇余キロ、南北五、五〇〇キロにおよんでおり、気候、地勢が一様でなく、飼われる種類や飼養形態に地域差がある。

中国の畜産形態は、地域によって純牧畜区、半農半牧区および耕作区に色分けすることができる。純牧畜区は内蒙古自治区、新疆ウイグル自治区、チベット西北部など半乾燥地帯・高原野草地帯に広がっており、半農半牧区は純牧畜区と耕作区の中間地帯や丘陵地帯に、また耕作区は耕作地帯の人民公社が中心の養畜となっている（農業技術大系畜産編Ⅰ、農文協、一九七八）。

私たちが見学する機会を得たのは、これの最後に属する耕作地区の畜産である。もっとも、この地区が中国では最も飼養頭数が多い部分なので、かいま見るには好都合であった。

まえおきはこの位にして、見聞の範囲で現状をお伝えしよう。

北京では、畜産関係の施設は残念ながら人民公社一箇

表2　中国の家畜飼養頭羽数　（単位：万頭，羽）

家畜名	1961−65	1974	1975	1976
ウマ	756	700	700	700
ラバ	166	157	157	157
ロバ	1,125	1,166	1,172	1,171
ウシ	6,127	6,370	6,411	6,460
スイギュウ	2,832	2,983	2,992	3,012
ラクダ	126	108	107	107
ブタ	19,692	23,364	23,281	23,832
ヒツジ	6,452	7,270	7,350	7,450
ヤギ	5,374	5,938	6,019	6,069
ニワトリ	100,408	125,933	128,117	131,200
アヒル	403	691	710	749

（FAO Production Yearbook Vol. 30，1976より
千のケタ四捨五入）

所しか見ることができなかった。案内された人民公社は、アルバニアとの和平を記念して一九五八年に設立された和平中阿友好人民公社で、主に乳牛、豚、アヒルの飼育場をまわらせてもらった。

この人民公社は、世帯数六、八〇〇、人口三二、〇〇〇人の規模で、北京周辺の公社としては中位との説明を受けた。人民公社革命委員会のもとに、生産大隊二八、生産隊七〇が組織され、穀物（米、小麦、トウモロコシ）の生産を主体に、畜産、養漁、果樹生産が行なわれており、そのほかに副業用の工場が五〇ほどあるのだという。もちろん学校や病院も整備されており、日本でいえばさしずめ一つの市位であろうか。農民の集団共有組織であるから、全員が公社員として生産にたずさわり、公社から給料をもらうシステムがとられている。

この公社が所有している家畜は豚三〇、〇〇〇頭、乳牛二、一〇〇頭、ほかにアヒルを年間六万羽出荷できる体制をもっているということである。

乳牛は五箇所の生産隊で飼養されているということで、その一箇所に案内された。牛舎の構造は日本で見られるのと全く同じもので、スタンチョに乳房のよく発達したホルスタイン種がつながれていた。なかでは、糞を掃除する人、牛を手入れする人、搾乳する人などが手ぎわよく作業を続けていた。搾乳は昔ながらの手しぼりで行なわれていた。けっして立派な牛舎ではないが、実に清潔に保たれているのには感心させられた。乳量は年間平均五、五〇〇キロをだしているということであった。エサは若干の濃厚飼料以外は、野草を中心に与えていた。広い中国のこと広大な草地があって放牧されていると思っていたら、日本とちっとも変りなかったのである。人海戦術はさすが中国という感じであるが、はたして採算がとれるのかという疑問が残った。

次に案内された豚舎は、四箇所あるものの一つで、繁殖・肥育の一貫生産を行っていた。案内された肥育豚舎は、通路の両側に豚房が設けてあり、豚房から出される糞は機械で集めるようになっていた。飼育品種は北京白と呼ばれる白色豚で、在来豚にランドレース、ソ連大白（大ヨーク系）などを交配したものだとのことであった。飼われているものを見るとランドタイプやヨークタイプがまじっており、なかには黒斑を有するものもあった。

種豚舎は、昔ながらの土塀作りで、小屋にあたる所が大型の土管を利用したような風変わりなものであった。時節がらカボチャがエサに利用されていた。濃厚飼料以外に農産物の余りをかなり使っているようであった。

最後にアヒルの育成場に案内されたが、ここではいわ

ゆる料理用の北京ダックを生産していた。種アヒル（品種は北京アヒル）から種卵をとり、人工ふ化させたヒナから肥育してブロイラーアヒルを生産するという一貫した方式がとられていた。北京ダックの肥育の特徴は強制給餌をすることで、仕上げ期になると一般給飼をやめ、一羽々々直接エサをのどに流し込むことをやっていた。アヒルは馴れたもので、時間が来ると給餌係の前に列をつくり、管をのどまで押し込まれてはエサを流し込まれていた。給餌は一日四回昼夜をとわず規則正しく行なうとのことであった。こうした強制給餌で肥育されたものが高級料理の北京ダックになるのだそうである。

私たちは北京滞在中に、北京ダック専門店で賞味する機会を得たが、労働者の平均給与が六〇元（七、二〇〇円）の中国で、なんと一人前二五元（三、〇〇〇円）もした。

北京滞在中はあとにもさきにも畜産施設は人民公社だけであったが、他の参観の行き帰りに農家の庭先で飼われる豚、羊、山羊はたびたび見ることができた。また北京市内では馬車の利用が盛んで、馬とロバの二頭だて馬車が頻繁に荷物を運んでいた。

南京では、江蘇省農業科学院の帝牧獣医研究所を訪問した。この研究所は科学院のなかの六つの研究所（畜牧のほか、食糧作物、経済作物、植物防疫、土壌々園芸などの研究所がある）の一つで、一九七七年に設立、（前身は省の農業研究所）されたばかりである。主に養豚を中心に研究がすすめられているとのことで、養豚場を見学させてもらった。この養豚場では新品種新淮（しんわい）豚の改良や発育試験が行なわれていた。新淮豚は、在来の淮豚（黒豚）に大ヨークシャーを交配して作出された品種で、まだ完全に固定されていないとのことであった。目下、黒豚に固定する努力がはらわれているが、交配によって黒、花豚（白黒）、白が四：十四：一にでるので黒の確保が当面の問題ということであった。ここで興味のあったのは飼料にホテイソウが利用されていることであった。

獣医研究室の方では、豚丹毒ワクチン、混合ワクチン、地方性肺炎、各種疾病、吸血昆虫、漢方獣医などの研究課題に取りくんでいるとのことであった。研究室の設備は、日本にくらべれば旧式のものが多かったが、整理整頓がいきとどき、実に大切に使っているのが印象に残った。

上海では、人民公社、牧場、研究所と三箇所をまわることができた。最初に宝山県彭浦人民公社に案内された。この人民公社は一九五六年に、それまでにあった八十四

の初級生産組合と十一の甲級生産組合を合併して設立したもので、世帯数四、五〇〇、人口四〇、〇〇〇人の規模で、九つの生産大隊と七十八の生産隊が組織されている。ここの生産の中心は野菜で、次に畜産に力を入れている。豚二七、五〇〇頭、乳牛三二〇頭、種鶏四、〇〇〇羽を所有しているとのこと。さっそく養鶏場と牛舎を見せてもらうことにした。

養鶏場には種鶏舎があり、肉用鶏（コーニッシュ）が平飼いで飼われていた。ここで生産される種卵でヒナをふ化させ、そのヒナをブロイラーとして出荷するのだという。出荷量は年間十三万羽を目標にしているとのことであった。鶏は穀物を必要とするので国が積極的に奨励していないため、公社での集団飼育は余りやられていないとのことなので、ここで見学できたのは運がよかったといわねばならない。大部分は庭先養鶏なのだそうだ。

乳舎には、北京同様ホルスタイン種が飼われていた。ここの飼い方も青草中心であったが、面白かったのは青草をたっぷり水につけて与えていた点である。後で聞いた話しではその水に濃厚飼料が溶いてあったのだそうだ。水のなかに青草を入れて与える給餌法というのに始めておめにかかった。

牧場は、上海の郊外にある牛乳公司第七牧場を訪問した。ここは一九五六年から一九五八年まで三カ年をかけて自立した牧場で、牛乳公司に出荷する牛乳を生産している。乳牛の頭数は一、六〇〇頭で、常時搾乳する牛が一、〇五〇頭、残りは子牛とのことであった。飼われている品種はすべてホルスタイン種で、ほとんど北京からのおさがりとか。乳量は、一九七七年の平均が五、〇〇〇キロと北京近郊よりは低い。一〇〇頭収容できる牛舎が十数棟。規模の大きいのにただびっくりさせられた。搾乳はミルカーを使っており、一日三回搾りを実施していた。繁殖は凍結精液による人工授精法が用いられており、受胎率は八五％以上とのことであった。飼料は、フスマ、豆粕などの加工飼料と青草を用いていた。加工飼料はすべて国家から提供を受け、青草は近所の人民公社より不足分を購入しているという。指導者は大変熱心で、七八年は平均五、五〇〇キロを達成したいと語っていた。懇談会では、受精卵移植の方法を熱心に質問され、ぜひ実用化したいのだと私を喜こばせてくれた。すでに、この牧場で移植によって二頭の子をとるのに成功しているそうで、中国をあなどれないと思わずにはいられなかった。

この後、上海市農業科学院畜牧獣医研究所を訪ずれた。ここは研究室だけで、附属農場は別にあるのだという。

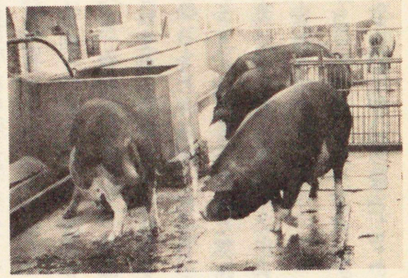
この研究所の主要研究課題は、豚の育種、鶏の育種、石油酵母の安全性、豚の管理技術、鶏の配合飼料、豚の地方性肺炎、豚の伝染性胃腸炎、住血吸虫症、鶏の吸血昆虫、漢方獣医学の応用などで、それぞれの課題ごとに研究室が置かれていた。この他、地方の公社からもちこまれる病畜の病性鑑定を行なう研究室もそなえていた。各研究室を一つ一つ見せてもらい担当者から説明を受けた後、会議室で意見交換を行なった。話し合いは日本側の一方的な質問に終始し特にめあたらしいこともなかったが、真剣に受け答えてくださった中国側の学者の態度の熱ぼさに頭がさがった。ここで力を入れていたのは、鶏では新浦東鶏の改良、豚では在来種の太湖豚にソ連大白豚を交配した上海白豚の改良などであった。

最後に訪問地失州では、南海県にある平州人民公社をみせてもらった。広州は台湾の南と同じ位の緯度に位置することから、これまでの三都市とは趣が異なり、南国ムードいっぱいであった。道すがら水牛をひっきりなしにみることができた。南京から上海にむかう車窓からも水牛はみられたが、その数の比でなかった。

平州人民公社は、一七、〇〇〇世帯、七一、〇〇〇人という規模の大きな人民公社で、生産大隊二〇、生産隊二六六から組織されている。主として水稲、サトウキビ、野菜の生産を行なっているが、豚、水牛、鶏もかなり飼われていた。この公社の場合、家畜は自留地に飼われるものが多いようであった。豚は生産隊でも集団飼育されていたが、前にみた公社よりも一箇所で飼い数は少ないようであった。飼い方は日本の農家と全く変りがなかった。ちがうところは、糞尿が有機質肥料として大切にされているので、糞尿処理に悩む必要がないことぐらいであろう。このことは中国中同じである。

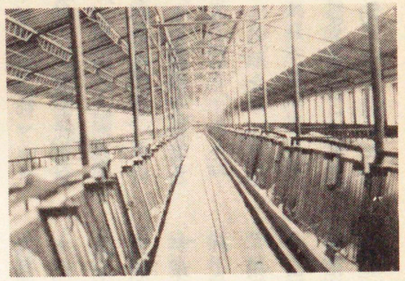
この公社では、農家の庭先を歩くといった感じの見学をさせてもらったが、まとまったところとしては獣医ステーションの豚舎を見せてもらった。ここには在来種のタイプを残した大花白豚と盤黒雑豚（バークシャーの雑種らしい）が飼われていた。各農家にはたいてい豚房があり、盤黒雑か在来タイプの豚が収容されていた。鶏は、いたるところに放し飼いにされていたが、すべて雑種という感じの鶏であった。

以上、かけあしで見聞を披露させていただいたが、紙面がつきたので筆をおくことにする。まだ生活の面などでお伝えしたいこともあるし、私なりの印象も述べたいが、これらの点は別に発表したいと思っている。

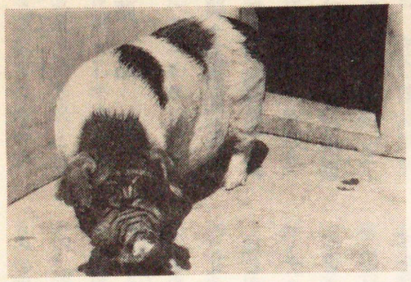


中阿人民公社の種豚場（北京）

上海市牛乳公司第七牧場の牛舎

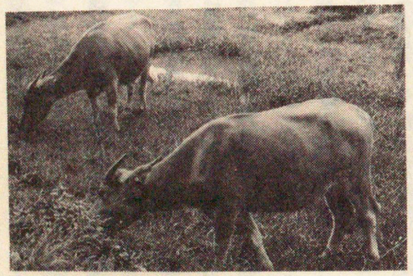


中阿人民公社の肥育豚舎



大花白豚（平州人民公社，広州）

馬車の利用が多い（上京）



南部に多くみられた水牛（広州）

フィリピンへの旅

―南の島でミミズを追って―

副手　伊藤晶啓

―南の島でミミズを追って―

筆者は、これまで未利用資源開発に関する研究として、ミミズの農業部門における利用性、特にその飼育法と家畜に対する飼料価値の点について追求して来た。

今回幸いにもフィリピン共和国におけるミミズの棲息状況、並びに品種などを調査する機会を得たので、以下その概要を報告する。

九月二日成田空港を出発し、フィリピンの主都マニラ市へと向う。夜半の十一時過ぎに到着し、入国手続きを終えて、空港の外に出る。空港の外は、黒山の人だかり、彼等は空港から出てくる外人を物珍しげにみつめ、中にはタバコをねだる者、鋭い目つきで我々を凝視する者などがおり、何とも不気味な雰囲気をかもし出していた。

こんな時この人垣の中に出迎えの方々の顔をみつけ思わず安堵する。

フィリピンでの第一夜は University, Philippin, in dos Baños（以後 U.P. Los Baños）で過した。

第二日目から早速U・Pの学生達の応援を得て、ミミズの採集にとりかかる。だが、あまり多くは採集出来ない。

「こんな調子だと果たして目的が達せられるであろうか。」

ふと不安な気持にかられる。U・P・の学生達は、フィリピンには恐らく日本に居ない変ったミミズが居る筈だと言って、一生懸命ミミズ採しに協力してくれた。

その結果ミミズは日本と同様ドブや排水路などの周辺に多く棲息している事が判明した。

四日目、すなわち九月六日、学生達が遂に変ったミミズを採集したと言って私の目前に持参して来た。

目撃するとそれはフィリピンでは比較的よく見かけるフツウミミズ科のもので、日本でいうクソミミズによく似たものであった。十日間を通じこのLos Baños地区で採集されたミミズのうち、シマミミズ科に属するものが最も多くを占めていた。このシマミミズは、日本のそれよりは少し大型で色も赤褐色であった。

第二の目的地 Baguio へは、Pancho 教授のお伴で Los Baños から七時間車に揺られて到着した。途中には渓谷、滝などが多く点在し、日本でいう昇仙境の観がある。

約二〇〇〇mの高地をドライブに身をまかせた。

Baguio は、フィリピンでの高級避暑地、すなわちマンションハウス、有名なゴルフ場、高級別荘地等が多く存在し、住民も多く賑やかな町であった。

Pancho 教授とエムサックという所に行き、ミミズの採集にとりかかる。ここでは、ミミズは農地にはあまり見当らず、農地から少し離れた土手に多く棲息していたが、これらのミミズは何れも小型で、萎縮した様な形状を呈しているものばかりで、その体色もどす赤黒い色をしていた。

ミミズがこの様に変色していることは、その棲息地がアルカリ性土壌であることを物語っている。一般に、ミミズは酸性土壌では白色を呈し、弛緩して長く伸びているが、一方アルカリ土壌の場合には、色は赤黒く体は萎縮しているのを通常とする。エムサックでは、果物、特にリンゴなどの試験栽培を実施しており、土壌の改良により如何にすればリンゴの栽培が可能になるかについて実験が進められている。

ミミズの糞は、目下日本では土壌改良剤として注目されており、筆者は赤土を肥沃な土壌に改良する方法として、ミミズの飼育が比較的簡便且適切な方法ではないかと考えた。この地区で採集したミミズは何れも Los Baños で棲息した物より稍々小型であったが、これらはほぼ同種に属し、フツウミミズ科のものばかりであった。この地区の気候は、朝夕は冷え込むが昼間は極めて清涼で過ごしやすく、極めて快適な気候であった。この様に気候がよいので、当地にもう少し長く滞在したい気分にかられたが、第三の目的地ミンダナオ島の Davao に行く必要性にせまられたので、後髪を引かれる思いでこの地を後にした。

U. P. Los Baños に一応戻り、翌九月十六日 Manila 空港から Davao までは空路約一時間半を要し、到着は八時頃となった。空港周辺は真暗闇で何も見当がつかない。

ホテルに直行し、明日の打ち合せをしてただちに床に就く。

既に渡航後二週間を経過し、筆者の体も既に限界に近づいて来た。翌九月十七日は比較的気持ちよく目覚め、ホテルの窓から外を見渡す。そこには素晴らしく美しい海が広がっており、ただちに外に飛び出し、しばし茫然とその景色に見とれる。南海のこの海辺にたたずんでいると、種々の事柄が脳裏をかすめる。一時を過して室に戻り、ミミズ採集の準備をし、昨夜の打ち合せに従って先ず周辺の小島などの調査に出掛ける。カヌーボートに乗

り、エメラルドグリーンの海に白波をたてながら一時間ほど行った小島に立ち寄り、ただちに調査を開始したが、砂地のせいか一向見当たらず、さらに民家の庭やその周辺を探し廻ってみたものの、僅かなサンプルを得たのみであった。このミミズは今まで採集したものとは異なり、シマミミズ科に属するものであった。次にミンダナオ島のバナナ園に行き農園内を探し廻ったが、どこにもミミズは見当らず、遂にこの場所をあきらめ今度は必ず入手出来ろうというココナッツ試験場に行った。従業員は異口同音に大きなミミズを見たことがあるという。そこで早速あちらこちらからサンプルを集めてもらったが、これらはフツウミミズ科のものとイソミミズ科のものに属する様に思われた。すなわち比較的太くて大型のものがフツウミミズ科であり、細くて長いものがイソミミズ科に属するものである。農園の回りにはミミズの糞が多く見受けられ、可成りの数が棲息しているものと思われた。

また、この土地は中性土壌と思われ、ミミズも極めて活力があり今迄採集した物の中で最良のサンプルであった。

この町のいたる所にミミズが見受けられ、ホテルの芝生にも糞が一面にちらばっていて、ホテルのボーイ等は、その糞をかたずけるのが大変な仕事だと嘆いている程であった。

ただ芝生がとても美しくよく生長している点から考察すると、ミミズの多く棲息している土壌は芝生の発育にも適している様に思われた。採集したミミズはホテルの洗面所で水洗後、ビニール袋に入れ、そのままの状態で翌日 Los Banos に持ち帰ったが、死亡した個体はなく健康状態も良好であった。

U. P. Los Banos でサンプルを乾燥させ、このうち一部の形状の良好なもの、変った形のものなどを標本用としてホルマリン漬けとし、日本に持ち帰った。これらのサンプルは、含有成分の分析をする一方、形態的分類を実施する所存である。

最近、ミミズに対し多くの人々の関心が寄せられており、他方ではその利用性についての研究が進められている。

従って今回得られた研究の成果が公表され、農業部門において利用された暁には我国の農業に及ぼす影響は大きいものと推察する。目下ミミズの利用は、単に農業方面のみならず動物飼料用（釣、ペット、養殖用）漢方薬（解熱、強壮薬）医薬製剤（美容）土地改良剤（植物緑化、植物栽培）として広く応用されさらにミミズの糞土の利用なども実施されている。

従って今後ミミズは我々人類にとって極めて貴重なものとなるであろう。ミミズの体成分は、その採取する飼料によってかなり異なるといわれているため、このたび採集したサンプルの成分を調査し、これまで明らかにされている各国のサンプルとの相互間の成分を比較するとともに、棲息環境の差異による体成分について明らかにすることは極めて有意な事と思われ、また筆者の興味のある処である。今度のフィリピンでのミミズの採集にあたっては、畜産学科長一戸教授の御紹介を受け U. P. Los Banos の Pancho 教授の御協力を得たが、Pancho 教授の適切、好意あふれる御配慮が一にこの度の採集旅行を極めて実り多きものとした原動力であると心から感謝している次第である。幸い再度フィリピンに渡航するチャンスに恵まれた場合には、今回にもまさる多くのサンプルを採集し、さらに養殖の可能性などの点についても検討を進める所在である。また更に機会があれば他の東南アジア諸国のミミズについても同様な調査をしたいと念願している現状である。

夏期北海道行

畜産二年　伊藤達美

小生は今年の夏、車で北海道に行ってきました。ここではその北海道に行った時のことを書こうと思っています。でも小生が北海道に行ったのは旅行で行ったのではなく、実習でもなく、昆虫採集の為に行くことになったのです。だからただ旅行で行ったのではないので名所や観光地にはほとんど行ってなく、北海道の田舎ばかり行ってきました。

七月二十日、試験が終ってすぐ迎えの車が大学に来た。今回の採集行で同行することになった林良一とその愛車カリーナである。林は小生の出身校、農大一高からの虫屋仲間で、かれこれ五年間のつき合いがある。まず、小生の家に戻り、昼食と昨日買入した食料の積み込みをすませいざ出陣！　予定では埼玉の久喜から東北自動車道に乗り、終点の築館まで行くはずである。久喜に着いたのが午後二時五十分。ここで給油してすぐ東北自動車道へ！

東北自動車道は中央・東名高速などとは違い、路面工

事中の場所が多くガタガタであった。車中ではカーステレオからSOULを流し、ただ窓の外を見ているか、林が持ってきてくれたにぎりめしを食っていた。運転手の林も運転しながら食った。飲んだり、食ったり、しゃべったりしながらなんとか終点の築館に着いた。始点の岩槻から約四〇〇㎞、約三時間三十分である。自動車道を下り、ガソリンスタンドへ。ここでコーヒーを買い、休憩。すかさず走りだす。午後六時二十五分。ここからは国道四号線を北へひた走り！　途中盛岡へ着いたのが午後九時十分、青森県に入ったのが、午後十一時。小生はここまで一度も車の中から外へ下りなかった。またここで一休み。カーフェリーの出航地、野辺地に着いたのは夜中の一時であった。フェリーの出航時間は午前二時二十分とのことなので一息。

午前二時十分、フェリーに乗りこみ出航。船中では船室にて寝る。今度、目がさめると目の前に北海道があるはずである。

午前六時三十分、起きてデッキに出ると目の前に北海道が横たわっていた。あと三十分もすると本州ではなく北海道である。

函館に着いた。また車に乗りひたはしる。途中、長万部・洞爺湖・喜茂別・定山渓を経て札幌に着いたのは午前十一時三十分であった。途中の洞爺湖温泉では、最近有名になった有珠山がもくもくと噴煙を上げ、町の中は灰だらけであった。

札幌の町は、東京とたいして変わらないが、町の区画整理がよくされており、市電が走っている。今日の採集予定地モイワ山に行ったが、何もいないので、早ばや午後一時四十分にモイワ山をたち十勝の幌加に向かった。

幌加に着いたのはちょうど日が暮れかかった午後七時頃であった。今日は駅に寝ることにし、夕食を作り、早ばや十時に寝た。

情報によると付近の土場にはさまざまな材木があり、無数のカミキリムシがいるとのことであったが、翌日、朝から行って見ると、材木などは見当らない。材木の運搬が鉄道からトラックに変った為、材木を留めておく必要がなくなったからである。当然、カミキリムシの個体数も少なかった。付近のノリウツギ・ショウマ・シシウドなどの花には無数のカミキリムシが集っていたが、普通種ばかりでめぼしいものはいなかった。午前十時頃、駅に戻り、小生一人寝ることにする。採集の時は、だいたい個々に行動する為、もしヒグマが出たら、その場で終りである。

午後一時頃起きるとちょうど林が戻ってきた。カミキリムシの珍品の一つ、アオヒメスギを採っていた。まいった。小生が寝ている間に採られてしまった。あわてて土場にいってねばってみるがやはり採れない。三時頃、あきらめ付近の花を見ながら駅に戻り、展足をし、飯を作り食う。幌加はまわりを山に囲まれた人里はなれた所で、人口は五人である。

鉄道は一日三往復ぐらいしかない。昼間は線路をまくらにして寝ていても平気である。

夜、駅でライトトラップを試みるが、何も飛んでこないので、すぐやめ、寝る。

翌朝、起きてみると、体中がかゆい、昨日は車中で泊った為、熱くてしようがなかった。その為、同行した林が窓を開けて寝たため、蚊やブヨに刺されたのである。北海道の夏は本州では考えられないほど、多数の害虫、特にハエ・蚊・ブヨが発生し、またダニも多く、草原などの草の上に数多く、人間の血を吸う為に待っているのである。本日は場所を移動して北海道のほぼ真ん中にある生田原に行って見ることにした。幌加から生田原までは約一四〇㎞の距離がある。時間にすると約二時間ほど。北海道は道はすいているが、道の悪い地域に行けば想像を超えるほど荒れている。ジャリの敷いてある林道を走り、大雪山を左に見ながら峠越えをし、そのうち大雪湖という人造湖が右に見えてくる。春期に雪が溶ける為に起こる増水を食い止める為に作られたようだ。

交差点に出る。ここで道を変え、左に折れ、今度は舗装された道路を飛ばす。生田原に着いた。ここの生産物は木材ぐらいで北海道の田舎的な所である。一般の人々が訪れるような所ではないので昼間も人影が少なく、ただ車道をトラックが通りすぎて行く。ここでも土場を中心にして採集を試みたが、やはり普通種しか採れなかった。今年の北海道は初夏から異状に気温が高く、東京から来た小生達にとって不快な気持であった。午前十時迄、次の目的地、知床半島にある岩尾別に向ってまたひたすら走った。北見網走を通り、約四時間で岩尾別に着いた。ここは羅臼岳を挟み羅臼の逆側の貧そな温泉地で、ヒグマが頻繁に出没し、道にヒグマの糞がころがっていることは、日常茶飯時である。

また、河川全体が温泉になっているところもあり、男女混浴になっている。しかし小生達は混浴に入りに来たのではないので採集を行なったが、ここでも成果はよくなかった。

午後四時頃、新たな目的地、逆側の羅臼温泉へまたひたはしる。地図の上での直線距離は二〇㎞程しかないが、車が通れる道は現在工事中で作っている真っ最中なので、もう一度知床半島のつけ根に戻り、また羅臼を目指して走らなければならなかった。その距離、約二〇〇㎞。

羅臼に着いたのは、夜の七時半頃だった。さすがに羅臼は加藤トキ子が歌った、「知床旅情」によってブームになった所なので若い連中がけっこう来ていた。東京からもやはり来ていた。明日は羅臼岳を目指しての登山なので早ばや寝る。翌朝四時起き。まだ外は暗い、朝食を作り、五時には出発した。

初めは開発中の道路を歩いた。なんだかちがう道を歩いているような感じがしたが、戻らずただひたすら歩いた。三時間位歩くと、最終地点に着いた。そこで仕事をしていた土方の人に羅臼岳への道を尋ねると、すぐそこ

にあると言うのでその道を行くことにした。登山道はあまり人が通った跡はなく、両側に生い茂げるクマザサが道を隠している。しばらく行くと枯沢に出た。ここから先の登山道は想像を絶する程ひどい。

小生たちは、羅臼岳への登山を断念し、枯沢を下ることにした。途中、崖が数ケ所あり、行く手をはばんだ。たぶん水が流れていれば見事な滝になっていることであろう。高さ約一〇m、石灰岩質の危ない崖であった。所々草が生えているのでそこを足場にし、恐ごわ下りた。川に出た。ここで一息入れ、今まで下りて来た崖をバックに記念写真を撮り、またもくもくと川を下った。川の所々砂が溜っている。そこに獣の足跡があった。クマの足跡らしい、そばに糞もあった。鼓動は速くなり、ドキドキ、長居は無用と思い、回りを見回しながら急いで下った。車に戻ったのは午前十一時頃。

もう一度、羅臼岳を目差し、登山道を捜し登った。一時間位登ると標高一二〇〇m位になる。ここら辺から、もうハイマツが生えている。本州ではありえないことだ。ここら辺で採集を行なった。ベニヒカゲ・コヒオドシなどである。時計を見ると午後二時を少し回っていた。雲ゆきもあやしいので、採集しながら下ることにする。羅臼温泉に着くともう四時、そろそろ今日の泊まる所を捜さなければならない。先輩から聞いた町営ラウス荘を捜したが、見つからない為、旅館に泊まることにした。一泊五〇〇〇円。夜は久々に風呂に入り、テレビも見れた。

翌朝、羅臼岳へもう一度登るはずであったが、外は雨が今にも降りそうな天気なので十勝三股に戻ることにした。

途中、標津に着くと、天気も回復し青空になり、また暑い日ざしがかんかんと照り付けてきた。車の中はクーラーがないので、熱くて熱くてしようがない。中標津・弟子屈・阿寒・足寄・上士幌・糠平。途中の阿寒はさすがに観光地らしく人が多かった。

幌加に着いたのは四時頃。羅臼を出たのが九時だから七時間の車中である。駅に着くといつものように食糧とシュラフ・ラジウスを出し、さっそく湯をわかしコーヒーを飲んで休んだ。駅前に住んでいる森さんという人がやって来た。北海道の人はなごやかで、親切な人が多い。夜は森さんの家におじゃまし、雑談。

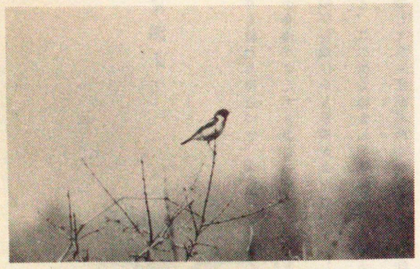
十勝三股にこのあと三日程滞在し、周辺の一四～一六の沢を中心に採集を行なった。それから士別のそばの朱鞠内に行き、また札幌のそばの茨戸で採集を行ない帰途につく。

最後に今回の北海道行でかかった費用は二人で十二万円程。走行距離は四〇〇〇km位。日数は十四日であった。

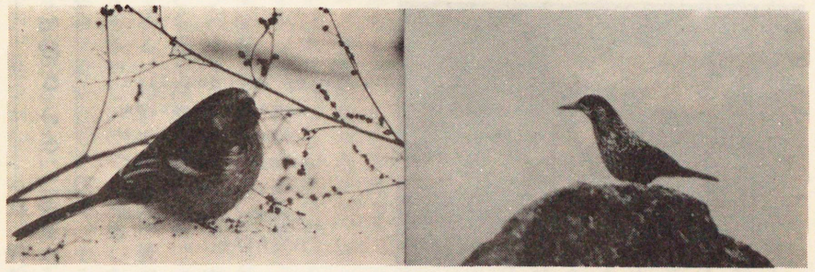
Photo

キビタキ　若葉，緑の中の目のさめるような黄色い鳥がキビタキである。喉から胸にかけての橙黄色は見る人を感動の極みへとさそいこむ。夏鳥として渡来し，よく茂った山地の落葉広葉樹林などで見られるよく目につく鳥である。

ノゴマ　喉の赤いヌズメより少し大きな鳥である。日本では本州以南でもみられるのは渡りの季節だけで主に北海道でのみ観察される。北海道では高山のハイマツ帯や，低地の草原や灌木で繁殖する。よくセリ科の植物にとまっている。



ノビタキ　黒と白そして喉の茶かっ色がすてきなコントラストを作っているこの小鳥がノビタキである。夏鳥で本州中部以北の高地の草原や，北海道の平地で繁殖し，春や秋の渡りの際には，江戸川や，多摩川，河流でもみられる。むねをはった直立姿勢は，ヒタキ類の特徴である。



ホシガラス 高山でガーガーとしわがれた声でなくごま塩だらけの鳥がホシガラスである。普通のカラスよりはずっと小さくキジバトを少し大きくした程度の鳥である。亜高山帯の鳥で冬でも平地に出ることはめったにない。

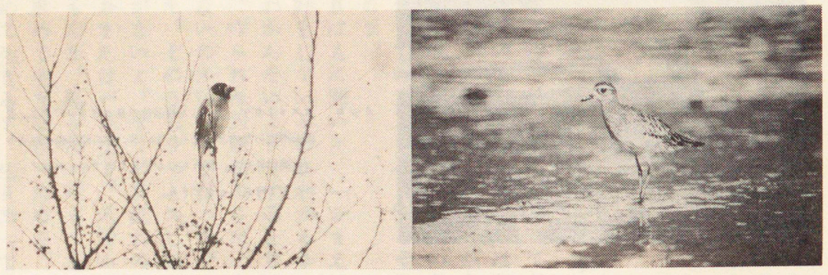
ベニマシコ 雪のなかにさいた赤い花のような小鳥がベニマシコである。北海道下北半島で繁殖し，本州には冬鳥として来る。主に低山の落葉樹林の低い叢で比較的よくみられる。

夏鳥に添えて

農大野鳥の会

春の鳥の渡りも終わりに近づき、本格的な夏鳥の季節となりました。山々では小鳥達がさえずり美しい翼を太陽の下で、惜しげもなく広げ、のびのびと飛びかう季節が来たのです。しかし今、現実に戻って考えると、この様な望ましい環境は、年々失われつつあります。それにも増して日本縦断道路の建設など、直接的、間接的にせよ、自然破壊を進める様な活動は、今だ盛んです。事実、日本の自然保護はイギリス、USAに比べて著しく遅れています。

たしか、昨年の今頃でしたか、カナダとアメリカの自然保護団体が、イルカの大量虐殺に抗議するという事件がありました。自然保護団体の抗議の内容は感情的な面もあり、私たちの間でも、もう少し事の真意まで考える必要があるのではないか等々と言った意見が聞かれました。自然保護団体のあるカナダ、USAの方が日本より、その活動が進んでいるのは確かです。それは、これらの国には無茶

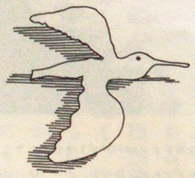


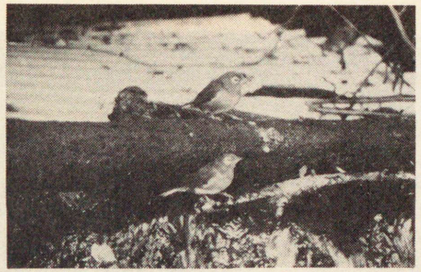
コイカル 黒い頭に黄色くぶかっこうな嘴のついた鳥がコイカルである。西日本，主に九州に冬鳥として渡来する回数は少ないめずらしい鳥である。

ムナグロ 写真はムナグロの冬羽で夏羽は胸，腹にかけて黒い。日本では春と秋の渡りの季節にみられる。砂州や干潟，さらには，作物未成長の畑や芝生のような乾いた場所でもみられる数の多いチドリ科の鳥である。

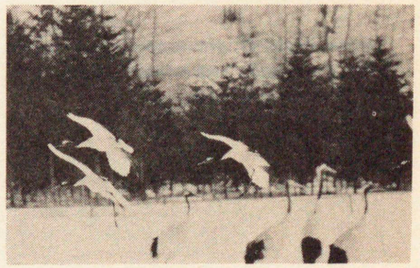
を言う人間もいますが、それらの発言をただのバカげたものとして扱わずに、真にその事態を見極め、それを解決する為に、最も良い方法を真剣に考える人々がいるからだと考えられないでしょうか。

日本でも各種の動植物の研究センターができ、自然保護の動きが見えて来ましたが、それらはまだ一般の理解も少なく、それぞれの個人、小団体におぶさったものでしかありません。が、個人が、ましてや我々、自然に働きかける学問を学ぶ者として、自然保護を確認し、真の保護とは何かを考え、個の意見も深く見つめ、個人を団体の、団体を日本の意見として、世界に働きかけるようにしたいものです。



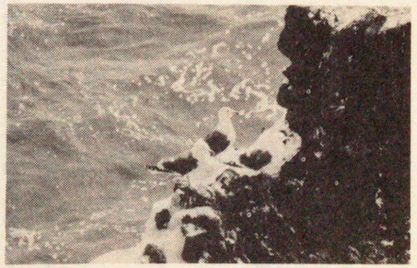


メジロ　ススメよりずっと小さな暗緑色の鳥がメジロである。夏は山に登らないと，見られないが，冬には都会の庭さきでも観察される。甘いものがすきな鳥でオレンジジュースなどで呼ぶこともできる。



タンチョウ　日本の冬鳥として忘れることのできない鳥にタンチョウがいる。銀世界を背景に青い空にむかって鳴く姿は壮麗である。この鳥は北海道東部の湿地や原野，湖沼畔などに周年生息しているが数は極めて少ない。

ツメナガセキレイ　これは背面が灰緑色，下面が黄色のツメナガセキレイの夏羽である。ツメナガセキレイは旅鳥又は冬鳥として渡来するめずらしい鳥であるが５２年夏，北海道においてツメナガセキレイの繁殖が東京農業大学野鳥の会において確認された……本邦初記録である。



オオセグロカモメ　全長６１０㎜トビを１まわり大きくした位の，大形のカモメである。背が黒いのと，尾に黒線のないのが特徴である。
冬鳥として，海岸，港，河口で普通にみられる。主に北日本に多い。

詩・随想

私と私と私

畜産一年　瑠璃　運

ある時、私は机に向かって必死になってエンピツを動かしている私を見た。それは何ともいいがたくあわれであった。背中を丸め目をちかちかさせて何も言わずにただただエンピツを動かしていた。ここで仮にエンピツを動かしている方を「A」、それを見ている方を「B」とおこう。

Bは Aに聞いた。「おまえは自分がどんなにみじめな格好をしているのかわかるか？」と――。Aは答えた。「わかんないよ。」するとBは、「おまえはかわいそうだ。作られた人形のようだ。それをおまえはいやだと思わないのかい。」と言った。Aはしばらくの間だまっていた。そのうちうっとおしいように口を開いた。「しかたがないよ。そういう流れの中にいるんだもん。」Bは「おまえはバカだよ。人のいいなりになって生きてるんだもんな。私みたいにもっともっと自由に、そして何かを求めて生きなきゃだめさ。」するとAは即、「何かを求めて生きる？　生きたってどうせ死ぬだけじゃないか。それなのに何を求めて生きろっていうんだ。」Bは「おまえの考え方はまちがっている。ならおまえはなぜ必死になってエンピツを動かしてるんだ。どうせ死ぬなら勉強なんて関係ないじゃないか。おまえは心のどこかで今日を生きなきゃいかんと思っているはずだ。私はいつもこう考えてる。毎日毎日を生きていけば必ず終点にたどりつくんだ。でもそこにたどり着いたとき、後ろを振り返り笑うことができたらそれで幸せだと思うんだ。おまえにはある程度運命づけられた道がある。しかし、その運命にも少し味をつけたり削ってみたりしたらどうだ。世の中の流れにささ舟のように流されるのもいいだろう。だがおまえの中にまだ芽ばえていないものがたくさんあるはずなんだ。どうだもう一度考え直してみないか。」Aは何も言わなかった。しかしAはAなりに生きていた。Aは言った。「私は常に流れに流されたくはないと思ってる。でも結局はそれに巻き込まれどうしようもなくなってしまうんだ。おまえにはそれはわからない。おまえには形がないんだもんな。私には形はある。だから世の中に奪われやすいんだ。おまえは常に理想像の中で物事を考え、理想の世界をおまえの中に描く。しかし現実は現実で理想ではないんだ。理想に近づくことはできる。でも理想になることはできないんだ。おまえにはおまえの生き方がある。それと同じように私にも私の生き方があるんだ。だったら私の生きたいように、それが惰性であったとしても生かしてほしいんだ。」そしてAはさっ

きのようにエンピツを動かし始めた。Bはそれを止めることができなかった。

たったそれだけだった。そして今、こうやって原稿用紙に向かっている私がここにいる。あのAとBの私はいったいどこに行ってしまったのか。あれ以来現われていない。私は時に自分のやっていることがわからなくなる時がある。誰かに助けてもらいたくても、私のまわりには誰もいない。そんな時、私は幸いにも詩を書くことで助けられる。こんな詩がある。

空よ
あなたはなぜ私を見つめるの
空よ
あなたはなぜそんな大きな心をもてるの
私はあなたのように
心広くはなれない
そのように生まれたから
私はあなたのようになれない
あなたは常に私の上にいて
常に見ていてくれる
だけど私はあなたに
気にいられるようには生きてはいけない
さみしいように

大人になってゆく
さみしいように
死に近づいている
そんな私を
あなたはなぜ
見すてようとはしないのか
いつか大人になった時
いつかひとりで歩けるようになった時
山のてっぺんに登り
あなたといっしょに握手をしよう
今は平地で虚勢を張って生きている
そんな私が山のてっぺんまで
素直に登れたなら
あなたは私にこういうでしょう
「やあ、元気かい？」と——

空よ
教えて
ほんとうの幸せは
私のほんとうの幸せは
いったいどこに——
あなたが持っているの
それとも私には
幸せなんてものはないの

いつも身震いをして
顔のない人形のように
片すみで泣いている
そんな私には——

空よ
遠い遠い未来のはてに
あなたは常にそこにいる
空よ
生きることのつらさは
あなたの微笑で幸せに
できるものなら幸せに
悲しいくらい幸せに
させてみたいと思っている

空よ
常にあなたはそこにいる
空よ
常にあなたはそこにいる

今、詩のノートを読み返してみるとほんとうに変わったと思う。以前は横書きだったのにこのごろは縦にしか書かない。私も大人になったものだとつくづく思う。私には「ほんとう」と言えるものが何一つとしてない。友達も幸せもそして自分さえも——。精神の不安定さが私をたびたび襲い、こんな詩を作らせる。

二重人格者の私
とめどなく涙の日
とめどなく笑いの日
私は誰？

二重人格者の私
悪魔の顔
マリアの顔
どこの人？

二重人格者の私
ああ無情！
ああ青春！
いつのこと？

二重人格者の私
心から愛する人
心から恨む人
あなたは誰？

意味も何もない詩。へたな詩。だけどこれも私の一つの生き方だと思っている。私の中には、いつも二人の私がいて理想的に生きよとか現実的に生きよとか言いあう。

でも今の私には私的な生き方しかできないし、それでいいとも思う。女の人は結婚して家庭について、それで幸せだと世間の人はよく言う。しかし結婚して幸せな人と不幸な人がいることを忘れたくない。とめどない事ばかり私の頭を横切る。そしていつもいつもわからないわからないと思いながらまた眠ってしまう。

不安定な私、そしてその中にいるもう二人の私。私が死ぬまで離れることがないと思う。だからこそ大切にしたい。最後にこんな詩を——。

雲の中って
いったい何があるんだろう
白いわたがしのような
フワフワういている雲の中
いろんな人の顔を描き
いろんな涙をさそう雲

雲……
できたらあの雲にのって
遠くの空へ飛んでゆきたい
雲……

いつかはきっと
私の恋人の顔になってくれるかしら

涙が出たら
そっと雲に届けてやろう
そしたら次の日
雨なのかな？

子供の反乱

畜産三年　根石吉市
（一九七八年一一月初旬～中旬）

独りでベンチに座っていると
様々な人が通り
生きていることは死ぬ事の
裏返しなんだなと思う
そう思う事が別段怖くもなく
やけに淡々と通り過ぎてしまう
暮色の濃い谷間のベンチに
独りだけいるのは
良いものだろう

ふと自分が病院に居る気がして
どぎまぎとあたりを見回すのだけれども
さっきからの空の色は

暗くはなって居るものの
何も変らない

食うということが降って来て頭を満してしまう
仮面の下の顔は段段と
仮面に吸収されるか

あの黒くプレスされた板状の
機械のようなものが
人間だと
それにしては堂々として歩いているものだ

成熟というものが
立派な人間になることが
石になることとなら
たとえ人が美しい石と言おうとも
僕は石になりたくない

僕は小供の刃をふりまわしてみる
あまりにも平然としている人間が多いから
しゃにむに僕は刃をふりまわす

人間の百分率
七〇％が汚れて三〇％浄いと思っている人
残りの三〇％が本当の純白かね

自分自身にまでうそをつく
本音というものが純白だとは誰も
言ってやしないのだから

うそをついて生きることが正当なことだと
あきらめて、仮面をつけて歩いている人の群に
僕は刃を無鉄砲にふりまわす

我が子よ

畜産二年　内山たま美

我が子よ
何でも吸収してみるがいい
何でも吸収してみろ
乾いたパンが
どんなにわずかな水滴も
逃さず吸収するように
お前もその乾いた心を
見知らぬ世界に投げ出してみろ

そこに一体何があるのか
自ら確かめもせず
扉に手もかけず
どこからともなく流れ来る声のままに
恐怖に怯えて立ちすくんで何になる

我が子よ
扉に手をかけろ
所在の定まらぬ声の主を崇拝するな
お前の目は何のためについている
真理を見極めるのは
お前のその目に他ならない
扉が開くのを待つな
待つ事は停滞だ
待っていたら　その時の長さの中で
お前の身体は屍と化すだろう
自分から事を起こさなければ
何も変わりはしない
不安と恐怖を伴う一歩だが
踏み出すのはお前だ

我が子よ
勇気を持って
力強い一歩を踏み出せ
扉を開けて

見知らぬ世界に
乾いた心を晒して来い

ランボーについての小研究

畜産三年　根　石　吉　市
（一九七八年一一月二四日）

私に取って不幸な事柄か幸福な事柄かは、別に取り上げて、昨年のデータに不足が有ったので、ここに報告する。（黒山羊はJ・N・R・ランボーの抽出で有った。）この報告がランボーの溶解を意味するのではない。訳者の小林の溶解度がほんの微量に高まったにすぎない。すなわち小林のランボーの溶解を意味する。

マラルメの言う、〃ランボーという名さえ偶然と思われるほどの、或る普遍的な純潔な存在〃という事柄を特別視してはならない。Divagations；"Arohur Rimband"のマラルメの言葉を引用すれば、〃この途轍もない通行者が居なくても、以前から間違いなく存在する〃ので有り別段、特別視する意識ではない。

大概において特別に異質な意識は理解される事はないのだ。ただ作家の純潔の所まで自分を照し合せてみるという内面の努力をしないにすぎない。

またこれもマラルメによって語られるが、ランボーの狂気を観察の捨去によるとしてはならない。事実は正反対に向いている。

私においてランボーはロマンティスムの良い殺菌剤の役割をはたしたが、滅菌までには私自身が用いなかった。凡人のロマンティスムはしばしば客観性を欠いた、自分に対しての純潔を信ずる。私の内のロマンティスムは、ツュウルレアリスムの仮面を付けたにすぎない。ランボーは自分に純潔を信じて詩に切りきざまれた人間ではない。客観世界の否定をしない意識が自分の純潔にどれほどの重量を計量したか。バランスには零点と表示されて居た事は確信できる。

現在、私の共鳴作用はランボーという意識に対して、子供の、野人の、殆ど動物的な眼で見ていたという分析が出されている。

イルミナツオンの大洪水においての一匹の兎の祈りについてランボーの苦しみを明す。チャールズ・チャドウィックにおいてランボーの神への回帰とみられる意識で有る。

ランボーは確かに「虹の橋にお祈りをあげる一匹の兎」で有って、この意識が「狂って、ついには、自分の見るものが理解できなくなっても、彼はまさしく見たものは見たのだ」言うまたひとつのランボーの意識と別個のものではない、ここに苦脳が有ると小林は言う。

観念の詩人で有るランボーに対して、単に我々がまず始めから出なおさなければならない事は、ひとつしかない。そしてこれを除いては理解できまい。それは小学生のような素裸の観察をしてみることとゴッホやドストエフスキーの地下室の人々の魂を持つことのように思われ、第一にはドストエフスキーの言う子供のような人々の意識を還元してみる必要が有る。

再度言っておく、読者はドストエフスキーの根底に隠さねばならなかった素朴な意識を還元しなければならない。

今後のテーマとして

ランボーの中の二つの意識についての考察が必要で有り、特にマラルメの星座についての考察をすすめるつもりだ。

風が吹いて

畜産二年　伊　藤　達　美

風が吹いている草原の中
なにも言わずただ耳をすます
風は何も言わず
ただ流れているけれど

何かが聞こえる
人それぞれ聞こえるものは
ちがうけど
それはみんな風のしわざ
風はさみしがりや
いろいろな言葉で囁く
風が流れる　何かが聞こえる

独りの朝

畜産二年　内山たま美

遅く目覚めた日曜の朝
カーテンを開けると
外はどんより曇り空
昨日まで
わずかに葉をつけていたポプラの木も
すっかり裸となり
風に吹かれて揺れている

その時　向かいの道路を
一人の女性が駆けて行った
まだ覚め切らない私の目は
知らず知らず　その後ろ姿を追っていた
するとその先に
同じ色のセーターを着た男が立っていた
ハッと我に返った私は　思わず目を閉じた
今はもう
何の約束もない日曜日
なんとなく　淋しい思いが私の中を過った

窓の外の空は　重々しいダークグレー
風も大分出て来たみたい
気まぐれに　昔の友達にダイヤルしても
冷たいコールが続くばかり
窓を締め切った部屋の中で独り
それでも今日は
太陽が出てなくてよかったと
ガラス窓を振り返ると
細い雨の雫が走り出していた

こんな時
クロスオーバーのメロウなサウンドが
乾いた私の心を満してくれる
泣いているようなギターの響きが

私の心の奥深くまで染み渡って来る
私の心も泣いているのだろうか

ヘッドホーンに耳を包むと
そこはもう
誰も入って来られない　私だけの世界
もう　誰の目も気にすることはない
あの女の目も——
そう思うと
ピンと張っていた糸が
プッツリと切れたように
私の心が
ガラガラと崩れてゆくのがわかる
まぶたを閉じているのに
熱いものが頬を伝って
雨の雫と重なってゆく
耳元でプツンと切れたメロディーも
私の頭の中では　まだ続いている
窓ガラスに
あの人の名を書こうと置いた指を
やっとの思いで　押し留めた

静かな静かな独りの時間
私はきっと
こんな時間が好きになると思います

「師」と思う心

一寸法師

「師」、これほど学生にとってすばらしいものはないはずである。
学生諸君、一生に一度でもいいから心から、この人が私の「師」だ、と言えたことがあったかね。
現在、学生が「師」と考える内なる心はどのように変わったか、多分、昔から変化はしていないと考える。
さっするに、近年「師」となるべく人間の人格、学識等の薄さが理解できよう。
やはり、「師」とあるべき人々は、再度、我をふりかえってじっくりと考え直してみては、いかがかな……。

主張

複雑怪奇なる表現

副題 ― 日本の味わい

畜産二年　Groissant

「日本」、この語は「ニッポン」と「ニホン」の二通りの読み方があり、どちらが正しいか。とか、こっちが正しいのだ。といった具合に論じる人もいるようだが、何故一つの語に対して、このような現象が生じて来るのであろうか。ちなみに聞くところによると、地名「日本橋」を東京では、「ニホンバシ」、大阪にある「日本橋」は、「ニッポンバシ」と読んでいるそうである。

一つには、文章上の表現における、調子とかリズムといったものを持たせ、流麗に流して聞かせる、あるいは読ませるとかいった配慮から、音便なるものが生まれて来たことも言えよう。例えば、「蹴っとばす」は「蹴りとばす」、「うれしゅうございます」は「うれしくございます」、「運んで」は「運びて」といったもとの形から、変形されていくことである。

また、伝統とか他の地域の人々のやる事に対する、反発といった意味をこめて、我々はこういう方式で行うのだといったような、一種の自己主張も、もしかすると含まれているのかもしれない。あるいは、このようなことが音便に結びつくのであろうか。だが、間違いともされずに、二通りの読みが共存することは面白く、考えさせられるものがある。

他にも「施行」を「シコウ」、「セコウ」。「礼拝」を仏教では「ライハイ」、キリスト教では「レイハイ」と読んでいる。ところが、名主を「ナヌシ」と「ミョウシュ」と読むのとでは、意味の異ってくる場合もあるからこと更面白い。

新聞等で、お堅い方々から、最近特に若者や女性の言葉使いが乱れてきた、等との批判的な見解が屢々見受けられるが、彼等だって何も、必ずしも正真正銘の模範的かつ標準語を使用しているとはいい難いのではないだろうか。ましてや、平安調、更に坂登った万葉調の言語を話しているわけでは到底あるまい。欧米の言語でもそうだが、使われている限り言葉に変化がつきものだということは、絶対否定出来ないのである。たとえ現在では不愉快な語句に聞こえても、何世代か後にはそれが当然として、その時代においては、標準語あるいは上品な言いまわしに、とって変わっているということも、あり得るのではなかろうか。現在の女性で、日常生活において話す人は、極めて少なくなったようだが、昔は上品な言葉づかいとされ、漱石等の作品にもよく表わされている、「〜じゃなくてよ。」とか「よくって。（よろしいです

か。）」といった表現は、もともとは花柳界の連中が使用していたものだそうである。（又聞きしたことであるが。）

「一枚をもって、せんべいとはこれいかに」、「一つをもってまんぢうと言ふがごとし。」。「江戸にて女房のことをかみ（神）様といふ事如何」、「清盛の妾を仏御前といへるがごとし。」。

長屋に住む、江戸の八つぁん、熊さんといった紳士達は、このような遊びを楽しんでいた。あのような言いまわしは、無論それ自体、特殊な意味があるわけでもなかろう。たわいない、言うならば言葉のお遊びである。だがその背景には、現在ではそれを口に出すことさえ忌避される傾向のある語、「封建体制」があったに相違ない。所謂、江戸時代は正に封建制の代名詞とされていい程、徹底した国内統制であった。こうした下で、最もその重圧がかかるのは、言うまでもなく農民、町民である。当然彼等は、この体制や権力に反発し、極端にいえばこれを崩壊させようとする意思が存在していたに相違ない。だが事実、反抗しようにも、武器らしい武器は殆んどなく、また百姓一揆はあっても大した効果は示さぬことが多かった。それでも何とか憂さを晴らしたいといった気運も手伝って、落語が発展していく一つの契機になっていったのではあるまいか。従って、あのような言いまわしを始めとして、古典落語には猛烈な反抗意識、皮肉、風刺も少しずつ含まれているようにも思われる。江戸っ子風の「てやんでエ！　○△の野郎め！」といった意識も、一つのユーモアの中に存在するような気がする。ユーモアは、本来同時に種々の墳しみそして怒りという体色に変わり得るカメレオンではなかったのか！　となると言葉遊びのユーモアにも、ゾッとさせられる。明治維新は、上層部内での隠やかな政権交代という外観を持つが、奥底には庶民の心理的意識をも含むという意味のことを或る教授が、述べていた。ユーモアが、もしこういうことにも関わるとするなら、非常に驚異な存在ということにもなろう。

或る流行歌の中で「馬鹿馬鹿しい人生より、馬鹿馬鹿しいひと時が嬉しい。」という件があったそうだ。或る授業で先生が、このことを話題にしたことがあった。先生が述べられるのには「人生確かにバカバカしい一面も、あるには違いないだろうけれど、人生をバカバカしいものと決めつけてしまうのは問題だ。」と。これには同感である。だいたい、馬鹿馬鹿しいということは、個人内での問題であって、現在ではその人にとって仮に馬鹿馬鹿しく見えても、それを馬鹿馬鹿しくないものに自分で努力すべきではないかと思う。そんな努力をせずして自分が馬鹿馬鹿しいと認めるひと時に、逃避してしまうのは、客観的に見てもそれこそ馬鹿馬鹿しい。揚くの果てには、その人自身が客観的に見て馬鹿馬鹿しい存在

になってしまうであろう。その人の心の中では、世界における あらゆる存在を否定し、虚無主義よりも超越した高次の段階を彷徨い、悟りでも開くつもりなのであろうか。もしそうなら、御目出度い話である。一部の学者はAという存在に対して、必ず何処かに反Aなる存在が実在し、両者が接近し、衝突すると、厖大なエネルギーを伴う大爆発が起こって虚無になるということを主張している。あの人は、それともこうなりたがっているのであろうか。

よくご存知の方も多いと思うが、「いただきます。」や「御馳走様。」に相当する英語表現は存在していない。強いてあるとするなら、お堅い家庭等でよくやるお祈り程度だそうだ。更に面白いことには、レストランで注文した品が、自分の食卓に運ばれてきた時、英語では "Thank you." の終わりの方を強調する程度、「キュー」と聞こえるように言うそうである。しかし、著者も含めて多くの日本人は、この際に殆んど何も言わない。もし西洋で、こんな態度を示すなら非常に不愉快に思われるだろう。店で物を買った時でも、店員はもちろん、店員に対しても挨拶する位であるから。今や諸外国との交流も、急増し他国の情勢もそして立場も、よく理解せねばならぬ時期に来ている。必ずしも、内輪だけならいいやとは言っていられなくなっていることも事実のようである。今こそ、言語を始めとして、種々の欠点は改善し、見習うべきところは多いに外国から採り入れるべきである。

わが国は、全方位外交を主張しているが、これが口先だけに終わらぬことを多いに望んでいる。その目標を達成するには、主義や体制を問わず、まず相手国の立場をよく理解することが必要であると思う。従って現在の日本語における、種々の表現も、外国式に見方を変えるなら、どう対処すべきかということを常に考慮しなければならないだろう。

また、日本は商業的な交わりよりも、文化的交流が少ない等とも批判される傾向がある。このことからも、文化の根本を成すものは言語である故、言語の問題は重要である。それは Nature に対立するものとして、人が手を加え作り上げていった、Culture なのだからである。言語は確かに変化していくものだが、同時に古い時代の言いまわしも、後世にいつまでも残していきたいものである。これすなわち古典と化した文化なのだからであろう。たとえ古くさい表現でも、美しいと感じられるものは、残していくべきではないか。

参考文献
斉藤忍随「プラトン」（岩波新書）
三好　弘「ことばのちがい」（公論社）

話・話・話

丈夫な歯ブラシ

畜産一年　磯田芳男

私は、みなさんも行なうように、毎日歯を磨いています。

ゴシゴシゴシゴシ

それは、ものすごい音をたてて、その後の気持ち、それは良いもので、毎日力いっぱい磨きます。

ところが困ったことに、私の歯ブラシは先がすぐに広がってしまってしまうのです。そのたびに新しい物と取り替えねばならず、たいへん不経済な毎日をすごしています。

◎広がった歯ブラシは歯グキを痛めるのです。

◎そのうえ、磨き終った時の気持ちが悪いのです。

私は、一度この事について薬局に救いを求めにまいりました。

「ねえ君、私が三十年間毎日使っている、ヤブトラ油脂株式会社の歯ブラシは不経済で困る。なにしろ、私が五日も使うと、もう先が広がってしまうんだ。そのたびに新しい歯ブラシを買わねばならない。どうか、もっと丈夫な物を紹介してくれたまえ。」

「それは困りました。ヤブトラ油脂株式会社の歯ブラシは当店でも最高の品でして、これ以上良い物と言われましても……ひょっとして、いやいや、でももしかしてお客さん、あなたは毎日力いっぱい磨いてらっしゃいませんか？」

「はい、力いっぱい磨いています。」

「ではゴシゴシものすごい音がするほど磨いてはいませんか？」

「それはもう、ゴシゴシゴシと。」

「それでは先が広がっても仕方ありません。はい」

「いや、だからもっと良い品物がほしいんだ。」

「ですが、力いっぱいゴシゴシやられては、どの歯ブラシも先が広がってしまいますです。」

「しかし、歯磨きは力いっぱいゴシゴシせねば、気持ちが悪いんだよ。」

「しかし、そのような歯ブラシは無いのですから。」

「では、私はどうなるのだね。これから一生、五日に一度歯ブラシを買い続けねばならないのかね。それは困るよ、せめて一ケ月は使えなければ、私の給料はみんなそれで飛んでしまうではないですか。私の給料はですねえ……」

「まッ、まあお客さん無い物は無いのですから。」
「では、これから作ればいいじゃありませんか。あなたは会社の人に会う機会もありましょう。その時には、ぜひ作って下さるように頼んで下さい。なにしろ、私は三十年もヤブトラ油脂株式会社の物を使っているのだから。」
「しかし、それまで何年かかるか…わかりませんよ」
「それは困る。できることなら、私は明日からでも丈夫な歯ブラシを使いたいのだ。それに、この歯ブラシの箱の裏には（当社は、みな様が健康な毎日をすごせるため、はたまた気持ちの良い口の中をつくるために、みな様の御期待にそうように日夜つとめさせていただいております。）と、ちゃあんと書いてあるじゃないですか。その御期待にそってもらいたいですなあ。」
「しかし、それはただの宣伝文句ですから、どの商品にも、同じように、また同じセリフで書いてあります。」
それでは、あまりにも困りすぎますよ。私は何を信じて品物を購入すればよいのですか。それよりなにより、私の所望するスバラシイ歯ブラシは、この日本中どこにも無いというのですか。

ヘラブナ釣り

畜産四年　M・N

ゲームフィッシングの横綱といわれるヘラブナ釣りに夢中になって一年。真夏は涼を求めて湖での釣り、冬は暖をとりながらの釣り池や釣り堀の釣りというように、一年中を通して行なえる。

仕掛けについて簡単に説明しておくと、ハリは関東スレ、ヘラバリ。ハリス〇、六～〇、八号。道糸〇、八～一号。板オモリを使用し、竿と浮きは、ヘラブナ専用のものを用いる。

一番手軽な釣り場は、南武線宿河原駅近くでの釣り堀で、この辺には、釣り堀が二ケ所ある。一つは、夏に照明下でのナイターができる。ナイターでの釣りは、浮きだけが照明によってはっきりと見え、良く釣れる。昼間の釣りなら、もう一方の釣り堀の方が当りが良い。二カ所とも午前中、午後と二回にわけてあり、一回で千円ほどとられる。

釣り堀ではおもしろくないと、次にはやはり野釣りとなる。場所は、火鳥山脈からそう遠くない田貫湖などが良いだろう。山中湖、精進湖なども良いが、ここが一番落ち着きやすい。エサは、マッシュポテトの他にいろいろと混ぜ合わせて使う。ヘラブナの型は、棚によってかなり違い、型の良いものを釣ろうと思うならば、当りが悪くなっても、根気強くやらねばならない。バンガローを使用して泊り込みでの釣りもできる。釣り人以外にキャンプで訪れる人もいて、夏はなかなかにぎやかである。バンガロー使用料金は、一日千五百円程度で、富士農場に行った帰りでも、のんびり釣りをしてはどうだろうか。

ヘラブナ釣りの楽しさは、ヘラ独特のスッーという当りに合わせることで、それがなかなか難しく、ちょっとしたスッーには、一年経過した今でもうまく合わせられない。当りに合わせ、ヘラブナを釣りあげたときには、最高である。又、ヘラブナは、よく大会が開かれ腕前が競われる。このあたりがヘラブナ釣りのおもしろさだろう。

釣り具の安い店として、新玉川線駒沢大学駅近くの「ポイント」を一度訪れてみると良いと思う。品数が多く、釣り具以外にもキャンプ用品などが置かれ駐車場もある。

最後に女性に一応入ると思われる私から一言。こんなに楽しい釣りも男性ばかりの遊びじゃないのですよ。新宿での買物や偉大なる食欲だけではなく、車の免許でもとって、女性諸君も大いに活動してもらいたい。

序章

畜産三年　福島康人

「にいちゃーん」
佳子は女の子と並んで木橋の向こうから手を振った。
佳子四才・兄まさる七才
紅葉の季節をもうじき迎えようとしているこの山村は県庁から遠く離れている。一週間前に父と共に引越して来ていた。父は機械のセールス販売等の仕事をしている都合で家をかえることが多かった。
流水の美れいな川が近くにあってそこにかかっている古い木橋の下には黄セキレイが住んでいたし、橋をコンコンと鳴らして渡るとススキ野と黄金色の稲穂が一本路を飾っている。そしてそれに続く山の森には五重の塔が建っていて大昔から大天使ミカエル様が住んでいらっしゃるという伝説があるという風な村。陽が落ちると稲わらのけむるような香りが川面をつたって来て大西家の縁先をつたった。勝は鼻頭にバンソウコウをはって気にしながら御飯を食べていた。父は食後の晩酌で顔を赤くして二人をみるともなしにながめていた。

「兄いちゃんいじめられとるんよ、一丁目のりゅうじとのぶおとええとそれから……」という妹に勝は口をきっと結んで「圭子、だまっとれ」とぶつ恰好をした。「あたし知ってるもん」となおも云おうとする妹を無視して勝は勢いよく御飯をかきこんだ。「佳子は勝が好きなんやのう」と赤ら顔を笑顔で綻せて父は大きくて褐色に日焼けした腕で佳子を抱き上げるとあぐらをかいている丹前のうえに乗せた。裏文戸が開らく音がして「こんばんわ、大西さん」とエプロン姿の大家のおばさんがたずねてきた。「あっ、おばちゃんだ」と佳子と勝は叫ぶと縁側へ飛んで出た。「どうも今晩わ、大家さん」と父は膝をなおしながら座布団をさしだした。「一人身じゃ酒の肴もないとやろ、朝鮮づけばしたけんどうぞ食べて下さい」

「どうも、どうも勝や佳子がお世話になってますのに……」と二人の話が始まったので勝と佳子は、おばさんについて来た老シェパードの太郎と遊び出した。太郎のしんちゅう色の首輪や耳をひっぱったりしながら佳子は「どうして太郎は女なのに太郎って云うとやろうね？　お兄いちゃん」と聞いた。勝は「わからんたい、そいがよかったとやろ」と云って太郎の鼻先に顔をやった。「太郎！いたい」と佳子は白い小っちゃな手で太郎をたたいた。今まで黙って座ってた太郎が立ち上がったひょうしで妹にぶつかったらしい。父との話が終って大家さんが太郎を連れてかえってから勝は「父さん、太郎はよかね、家にも欲しかね、子どもはおらんのやろか」と盛んに太郎のことを喋り続けた。妹は父のひざの上で微かに寝息をたてはじめている。「勝よ勝は近所に年の近い友達がおろうが佳子はお前が自分と遊んでくれんようになって寂がっとるそうな。」

「明日、大家さんの家に佳子と同い年の子が来るそうやけん、昼頃にでも連れてってやりなさい」と父は佳子の頭をなでながら話した。佳子の髪は明るい栗色をしていた。

靄のかかった朝は魚の行商人の声で明けた。今日は週に一度魚売りが山を越えてやって来る日だ。「さかなー、さかな」という歌声は金魚売りと同じイントネーションだなと勝はいつも想う。佳子と勝が目覚めると父が鰺の開きを買って来ていた。「あっ顔のない魚！」と桜んぼのパジャマ姿でトコトコ台所に行った妹が声を上げた。白いパンツ一枚で勝が飛び出して来て顔をのぞかせた「なんね、頭のついとらんだけたい」と云った。父はうちわをパタパタ扇ぎながら「起きたら顔洗って箸と茶碗をもって食台に行きなさいと云った。二人はビューとかけて行った。朝食がすむと父はいつもの背広姿でスクーターに乗って出かけた。勝は

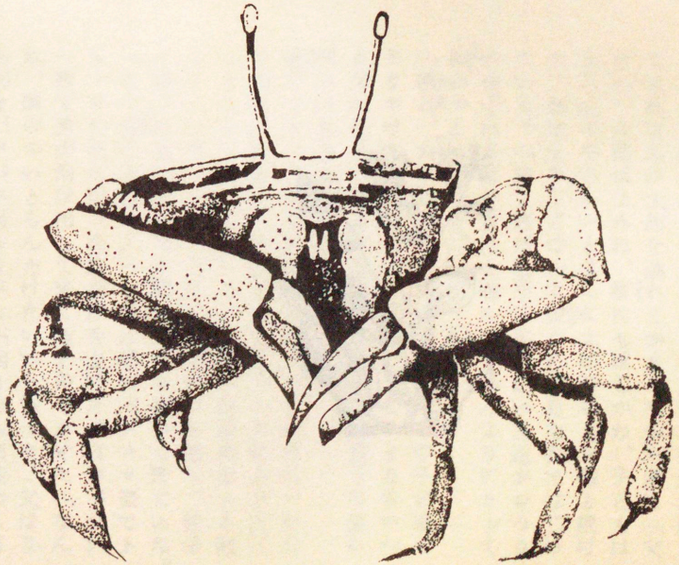
大家さんの家で昼食の用意がしてあるから佳子と一緒に行くようにと頼まれていた。

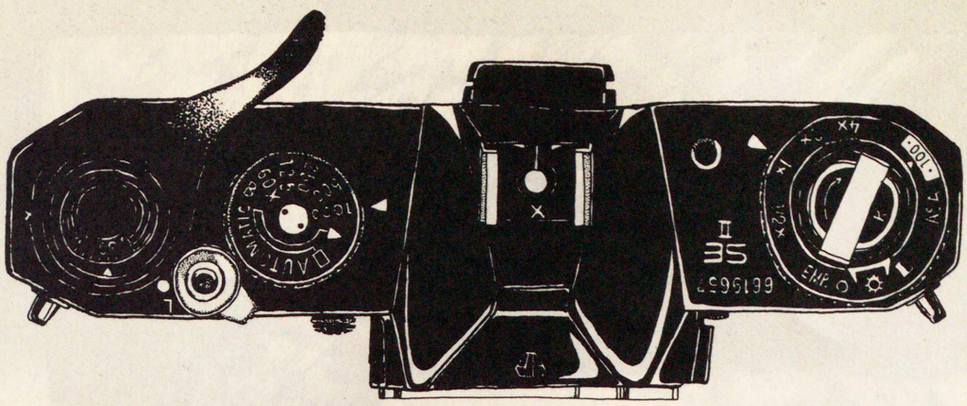
「兄ちゃんもおばちゃん家に行くとやろ。ね！」

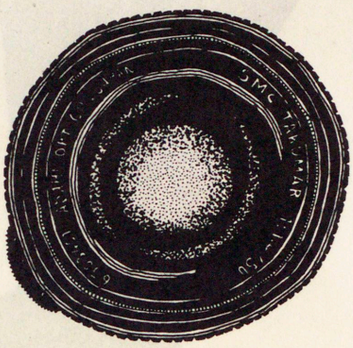
「うん、佳子は大家さん家に女の子が来とるそうやから仲よう遊ばんばよ」という言葉に佳子は顔を曇らせて「どこ行くと？　うちも行きたか、」と云った「小ちゃい子は危なかけんつれていかれんと」と少し強い口調でいった。「ほら！　うち強かもん」と云ってこの前転んで擦りむいた膝小僧を見せて「これすごく痛かったんよ、でもうち泣かんかったもん」と得意気に顔を輝やかせていった。檜で囲まれた大家さん家の門を入ると太郎が尻尾をふって飛びついてきた。その後ろからおばさんが女の子の手を引いて玄関に姿を出した。勝はペコリとおばさんに御辞儀をして後にかくれている女の子を見た。それから佳子に微笑みかけて「夕方になったら向えに来るけん仲ようしとくとよ」と云うと木橋の方へ門をぬけて走りだした。佳子はおばさんの手をしっかりにぎって叫んだ。

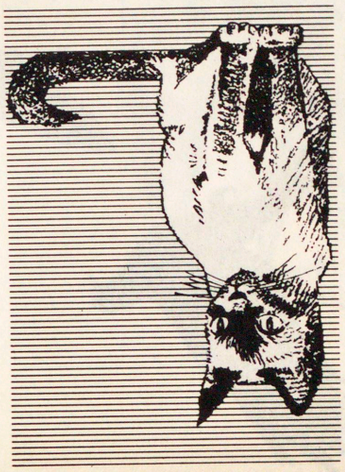
「兄ちゃん！　またいじめられるよ」おばさんのもう片一方の手は女の子ににぎられていた。空は真青に透み渡り山々からは昼を告げるアンジェラスの鐘が木霊している。

DRAWING




AUTO-MATIC
35
SE
II
6619657
ASA
100
4X
2X
1X
1/2X
OFF
ON


SMC TAKUMAR
1:1.8/50



研究室だより

家畜育種学研究室

当研究室では現在鈴木教授をはじめ大学院生七名、学部学生二十六名、総勢三十六名で構成され活動を行っている。

我々は畜産学的見知より、より現実に適した有効な家畜改良の品種を基礎として細胞遺伝学や血清学的手法により研究を進め、また研究室の中だけでなく広く世界にも目を向け各地に足をのばし、見識を深め育種を追求していくものである。

さらに互いに知識を深める意味で、毎週一回ゼミナールを開き、同時に室の運営を決定する場として談話会をもうけている。

また各方面より講師の方を迎え興味深い話をいただいている。

さらに年一回の研修旅行で各研究所、試験場等に出かけていき多くのものを得、また反面懇親を深めている。

昭和五十三年度 畜産学科 卒論題目

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
17	石井美智代	農村における疾病と農天症について	鈴木(正) 吉村
49	勝又　誠	山羊の血液型に関する研究。特に日本ザーネン種における血液蛋白の多型	天野
53	上神谷英典	フィリピン水牛の遺伝学的、形態学的研究。特に毛色ならびに鼻紋について	天野
79	小林　裕子	台湾におけるアヒルの飼育実態について	鈴木(正)
94	七田　昭彦	水牛の形態学的研究。フィリピン水牛の体型について	天野
132	土田　春行	ハトの血液蛋白および酵素の多型に関する研究	田中
134	坪谷　廣人	豚の染色体に関する研究。特に培養細胞における異常染色体について	田中 柴田
143	成田　和行	フィリピンにおける水牛の飼養ならびに利用実態	天野
153	長谷川英雄	豚の白血球型に関する研究。特にSL－Aの出現頻度について	田中
192	薬師寺俊輔	牛乳用種の乳量について	鈴木(正)

211 渡辺 文樹 兎の赤血球酵素に関する電気泳動的研究 田中

214 松井 栄介 家畜の染色体における二次狭窄に関する研究 田中 柴田

223 西野 芳明 アフガニスタンにおける緬羊の現状と育種学的一考察 天野

家畜生理学研究室

昭和五十二年度に家畜育種学研究室より分離独立した家畜生理学研究室は、渡辺誠喜教授、伊藤副手両先生の御指導のもとに、大学院生四名（博士課程前期二名、同課程後期二名）学部四年次生十名、三年次生十二名、（及び専攻学生四名）の畜産学科においても歴史が最も浅い研究室であります。

今年の九月に二号館三階に研究室が移転し誕生間もない研究室とは云え、家畜の体内機構について生理学的に究明している研究室であります。

当研究室の環境としては、大学院生から学部三年次生まで実験研究に関してはそれぞれ厳しく指導が徹底していますが、反面自由な時間帯には、無礼行の会話がかわされ学問のみならず人生論についても、先生をはじめ室員一同が論議し、明確なサゼストが与えられお互いに非常に居心地の良い研究室で、室員一同愉快に学生生活を送っています。

本研究室の主要な研究テーマは、㈠ 家畜家禽の内分泌に関する研究 ㈡ 家畜家禽の代謝に関する生理遺伝学的研究 ㈢ 家畜家禽の体液に関する免疫学的並びに血清学的研究 ㈣ 家畜家禽の細胞膜に関する研究の四つに大別され、生理学的側面からの蛋白質合成の向上をはかることを目的としており、室員全員がそれぞれ協力しあい各自の研究題目に向かって邁進しております。

家畜生理学研究室の年中行事としては、週一回の室員によるゼミナール並びに卒業生卒業論文発表会を行なう一方学外講師による特別講演などが行なわれます。また、年一回の研修旅行、新入室員歓迎会及び卒業生歓送会なども行なっています。

1 相沢 康男 豚卵胞嚢腫の形態的分類並びに卵胞液中のホルモンに関する免疫学的分析 渡辺

11 飯田 久善 ミツバチの種間における体液蛋白質及び酵素の電気泳動的比較 渡辺

14 池原 正幸 家兎肝臓のバイオブシー及びそのエステラーゼ、ホスファターゼに関する研究 渡辺
特に性ホルモン投与家兎並びに肝機能障害家兎について

33 岩崎 紀子 ドバトの生態と分布に関する研究 渡辺

68 久保 幸司 鳩の血中プロラクチンの免疫学的測定 渡辺

88 坂本 彰司 鶏下垂体性腺刺戟ホルモンの精製並びに抗ホルモン抗体の抑制作用に関する研究 渡辺

96 渋谷 康二 鶏卵白中の糖および糖蛋白質含有量の系統差 渡辺

137 中島 功 HK型およびLK型山羊血球膜の生理機能の差に関する研究 渡辺

154 葉泰 弘美 ハタネズミ（Microtus mon tebelli）の実験動物化に関する研究 渡辺

155 花岡 秀朗 山羊血球中の数種酵素のアイソザイムに関する研究 渡辺

197 山岸 聖子 山羊血清アルカリ性ホスファターゼに関する研究。特に性ホルモンの影響について 渡辺

家畜繁殖学研究室

当家畜繁殖学研究室では、一戸教授、石島助教授、門司助手の指導のもとに、大学院生二名、四年生三十名、三年生二十四名の室員で構成され、研究室は家畜班、牛班、豚班、実験動物班の四班に分れ各動物ごとに研究内容も多種多様に亘っており室員はそれぞれ個々の役割分担のもとに各動物に愛情をそそぎつつ、日夜真理の追求を行っております。

又、各班は縦割りの関係だけではなく、横の関係も親密にし、常に情報の交換を行い、より、すぐれた畜産人になるため努力しています。

更に十月には新研究室に移転し破竹の勢いで各自の卒論実験あるいは、来年度の卒論等に向って、ユニークな発想、独創性に富んだ実験を行っております。そして先生方には、親切かつ適切なアドバイスをしていただいております。しかし実験という華やかな面だけがあるのではなく、朝八時半よりの作業（飼育管理）を通して日常の生活の中より各動物の生理生態を学んでいます。地道な事ではありますが非常に貴重なことです。対話という手段を持たない動物との対話は日々の触れあいにしか見い出すことが出来ないのです。

最初は除フン等には閉口することでしょうが、フンの状態で動物の健康状態をある程度知ることができるのですから。

各動物別に分れ週一回のゼミナールがあり文献を読んでの討論、現在注目を集めている報告について、卒論の説明その他巾広く知識を吸収するがため努力しています。

しかし、このやる気は研究にだけ向けているのではありません。研究室に所属していると、とかく専門だけの頭でっかちになりがちであるが、若人の我々は朝六時集合の早朝野球、卓球と早朝より寒さ、眠さをものともせ

ず、頑張っています。

大学生活につきもののコンパ、その時には我研究室の一流コックが腕をふるいすばらしい、オードブルを作り上げてくれるのです。

コンパが最高潮に達すると、一戸教授の十八番、サントワマミー、ダヒルサヨ、がとびだします。石島助教授のカントリーもなかなか聞きものです。これを境にコンパは潮が引くごとく終りを告げます。

この様によく学び、よく話し合い、よく遊びそして一人前の社会人としてはばたいていく。このように大学生としての行動は、大学生活の中の一過性のものではなくはっきりとその生活の中に足跡をはっきりと印していく。

研究的な立場の中に基礎をおき、そこに集う学生達の舞台が家畜繁殖学研究室であります。

大空にはばたいた大鳥が古巣に戻り翼を休める様に研究室よ永遠に。

6 天野 敏明 反復過排卵処理家兎の反応低下の要因に関する研究 石島
13 池田 一彦 宮城県仙南地方における乳牛の繁殖に関する実態調査 一戸 荻原
24 伊藤 博 雄鶏における下垂体前葉PRLの加齢にともなう変化 一戸
27 井野 陽介 牛精子の凍結融解後の精子の生存について 一戸
28 井原 茂 ホロホロ鳥における人工授精の応用に関する研究 特に定条件における自然交配と人工授精との比較 一戸 西脇
32 井本 幸裕 大分県宇佐地方における酪農の現状と将来 一戸 荻原
46 樫本 哲男 鶏卵における卵胞膜開裂に関する組織学的研究 一戸
48 片桐 邦彦 雑種（合成豚）の繁殖及び子豚の発育について 鈴木(伊) 一戸
50 金井登美夫 クラッチ内における卵重と卵黄重量の推移について 一戸 西脇
60 岸 広徳 フィリピン共和国における水牛の実態調査 一戸
62 北島 省吾 ラット受精卵の非外科的採卵と移植 石島
70 倉沢 清春 日本ウズラの排卵誘起に関する研究 一戸
72 栗原 浩一 乳牛の発情に伴なう性行動に関する研究 荻原 一戸
76 小林 篤史 鶏の排卵機構に関する研究 一戸
82 後藤 賢治 豚精液の凍結保存に関する研究 一戸
87 坂口 正人 鹿児島県における和牛経営の現状と今後の課題 一戸 荻原

91 佐藤 秀憲 豚精液性状の経時的変化に関する研究 一戸 鈴木(伊)
92 真田 孝 経産牛と未経産牛における子宮頸管粘液像の比較について 荻原 一戸
93 佐和 弘之 PGF2αの投与による豚の分娩誘起効果について 一戸 鈴木(伊)
97 島袋 宗友 過排卵処理マウスの着床後の胚死亡について 石島
101 菅原 和彦 牛精子の融解温度の比較と形態変化について 一戸
121 竹川 敦 フリーマーチンにおける染色体に関する研究 一戸 渡辺
127 玉井 清二 定地における養蜂経営について 一戸
133 角田 誠 ドバト公害対策実験 一戸
141 中山 信吾 間性豚の生態における観察 一戸 渡辺
142 並木 一 雌豚の発情並びに出産にともなう体温とPH値の推移について 鈴木(伊) 一戸
144 成田美代子 HMGとHCGによる未成熟モルモットの誘起排卵 石島
145 南平 晴久 外部生殖器異常豚の染色体構成について 一戸 渡辺
148 野崎 敏勝 和牛の分娩に関する研究 荻原 一戸
151 橋谷田 東 ゴールデンハムスターにおける受精卵の移植 石島
159 比嘉 英俊 過排卵処理ネズミの排卵時間及び卵子の分割進行程度 石島
193 安田 英司 明暗リズムが日本ウズラの排卵放卵に及ぼす影響について 一戸
196 矢吹 吉次 卵胞のう腫牛の卵胞液と胆汁中におけるエストロージェン値の比較について 一戸
208 吉原 宏道 豚精液の低温保存に関する研究 一戸
228 大橋 徹 豪雪地域の酪農の現状と今後について 一戸 荻原
229 岡村隆太郎 牛乳の流通過程に関する研究 一戸
232 森 哲 牛肉流通過程における問題点について 一戸

家畜飼養学研究室

今日我国の畜産界は、世界的な穀物需給不安定による飼料価格の値上りの懸念、食品安定上の要請からの配合飼料添加物の規制強化など依然として厳しい環境にある。そのような中で飼養学及び飼養研の占める位置は、ます

ます重要になりつつある。

飼養学は、学問的分野としても広い範囲にわたっている。すなわち家畜飼養、管理、飼育という三本柱のもとに杉村敬一郎教授、伊藤澄麿助教授、栗原良雄講師を中心とした指導のもとに種々の研究活動を行なっている。主な研究テーマとしては、アミノ酸、脂肪酸、エネルギー代謝、一般飼料、飼育管理、牧草・飼料作物関係等がある。

研究室行事としては、富士農場に於ける畜産実習、群馬県畜産試験場に於ける家畜管理実習並びに、一般飼料成分々析演習等を行なっている。また室員相互の親睦を計るため、野球大会、研修旅行、餅つき大会等を行なっている。

現在の室員数は、杉村先生、伊藤先生、栗原先生、大学院八名、四年生三三名、三年生二一名、特別室員一名である。

2 青木 哲 給水量が産卵鶏に及ぼす影響について 伊藤 栗原

10 安藤 友一 主題 産卵鶏用市販配合飼料の比較試験 副題 二年鶏における産卵成績及び消化率の比較 伊藤 栗原

12 飯塚 晃 主題 幼雛における必須脂肪酸に関する研究 副題 飼料中のリノール酸とグリセリンとの関係 伊藤 栗原

15 伊沢 英雄 農産製造粕の保存方法に関する研究 伊藤 栗原

16 石井 富保 主題 飼料原料の相違が豚（合成豚）生産に及ぼす影響 副題 生後六十日令より試験終了時（生体重九十Kg）までの発育について 伊藤 鈴木 伊 栗原

23 伊藤 清治 トウモロコシに対する牛ふん多施の影響に関する研究 特に、硝酸態窒素の集積回避法 伊東 拓 大山 拓

44 小渕 健一 豚舎の施備・設備の調査 桜井

47 梶野 真澄 Variation of free amino acids in organs with the acute deprivation of amino acids under the difference of dietary calory levels 杉村

57 菊池 清 主題 鶏飼料中の窒素・炭素バランスに関する研究 副題 各種飼料の含有エネルギーと窒素・炭素バランスとの比較 伊藤 栗原

73 栗原 三郎 主題 サイレージの好気的変敗に関する研究 副題 サイロ開封後のカビの経時的変化 栗原 大谷

75 小出久美夫 Variation of free amino acids in organs with the acute deprivation of amino acids under the difference of dietary calory levels 杉村

77 小林 庄市 主題 飼料原料の相違が豚（合成豚）生産に及ぼす影響 副題 生後二十日令より六十日令までの発育について 伊藤 鈴木 伊 栗原

78 小林 孝弘 主題 サイレージの好気的変敗に関する研究 副題 サイロ開封後の酵母の経時的変化 栗原 大谷

95 芝埼 真 主題 幼雛における必須脂肪酸に関する研究 副題 飼料中のリノール酸レベルとグリセリンレベルの関係 伊藤 栗原

98 白井 信行 主題 産卵鶏用市販配合飼料の比較試験 副題 二年鶏における産卵成績並びに卵質検査 伊藤 栗原

106 鈴木 啓支 主題 幼雛のエネルギー代謝に関する研究 副題 飼料中の不消化物量が消化率におよぼす影響について 伊藤 栗原

107 鈴木 昌晴 主題 飼料原料の相違が豚（合成豚）生産に及ぼす影響 伊藤 鈴木 伊

110 須藤 哲 反芻胃内容物の幼雛における飼料価値について 栗原 伊藤 栗原

111 清寺 智 反芻胃内容物の栄養価値に関する研究 伊藤 栗原

114 園山 信博 主題 産卵鶏用市販配合飼料の比較試験 副題 大雛時における飼料の利用性について 伊藤 栗原

123 田島 照彦 主題 家兎の栄養に関する研究 副題 消化率と食糞現象との関係について 伊藤 栗原

125 田中 文吉 主題 家兎の栄養に関する研究 副題 家兎における飼料の消化官内移行について 伊藤 栗原

130 築館 達雄 主題 各種脂質の飼料価値に関する研究 副題 肉用種鶏の生育におよぼす影響 伊藤 栗原

135 徳永 修一 家兎の大腸部位に於ける繊維質消化について 伊藤 栗原

136 鳥海 周作 主題 飼料原料の相違が豚（合成豚）生産に及ぼす影響 副題 産肉性について 伊藤 鈴木 伊 栗原

157 林 正博 動物性油脂の添加が肉用種鶏の生育及び肉質におよぼす影響 伊藤 栗原

161 日野ひろみ　主題　ホロホロ鳥の成長に要する養分要求量に関する研究　伊藤　栗原
　　副題　十週令以降、特に蛋白質量とエネルギー量の測定について

169 古畑　秀治　乳牛の省力管理に関する研究　吉村

170 星野　和司　主題　各種脂質の飼料価値に関する研究　伊藤　栗原
　　副題　肉用種鶏の肉質におよぼす影響

176 松岡　正行　主題　産卵鶏用市販配合飼料の比較試験　伊藤　栗原
　　副題　幼雛・中雛時における飼料の利用性について

177 松本　信也　主題　ホロホロ鳥の成長に要する養分要求量に関する研究　伊藤　栗原
　　副題　〇～十週令、特にタンパク質量とエネルギー量の測定

178 松山　邦夫　複合酪農の生産構造について　吉村

184 三輪　真二　主題　飼料原料の相違が豚（合成豚）生産に及ぼす影響　鈴木（伸）　栗原
　　副題　各段階における消化率について

185 向山　洋　グラスサイレージ調製時に於ける薬剤利用の影響　伊藤　栗原

187 村井　貴幸　給水量が産卵鶏に及ぼす影響　伊藤　栗原

200 山本　治生　ウルグアイに於ける放牧の実態及び可能性・将来性　伊藤

204 吉岡伸一郎　北海道別海町美原地区における酪農の飼料構造の調査と分析　伊藤

205 吉島　正昭　北海道別海町美原地区における自給飼料の立場から見た草地の利用について　伊藤

207 吉田　博孝　馬の栄養に関する研究　伊藤

210 渡部　和彦　佐渡地方における養鶏の経営分析　吉村

215 佐谷野利幸　主題　材料草中の窒素含量がサイレージの品質に及ぼす影響　淡谷
　　副題　詰込材料のCN比とサイレージ有機酸組成との関連についての検討

217 梅沢　史明　主題　モミ殻の飼料化に関する研究　伊藤
　　副題　モミ殻の飼料価値の検討 Aspergillus Oryzae 培養

218 蜷川　一志　主題　幼雛のエネルギー代謝に関する研究　伊藤
　　副題　飼料中の不消化物量が発生熱量におよぼす影響　栗原

227 岩間　由彦　鶏における代謝エネルギー簡易測定方法の検討　伊藤　栗原

221 黒田　章　松本市新村地区土壌の理化学性に関する調査研究　蜷木（化）

222 難波　一義　カルフォルニアの企業的酪農　津川（拓）

225 藤野　祐彰　カルフォルニア

家畜衛生学研究室

本研究室は、近江弘明助教授、渡辺忠男講師両先生の御指導のもとに、四年生二十四名、三年生十八名、二年生一名、一年生三名、室員一同が一体となって活発なる研究活動を行っている。

研究活動としては、各々希望する家畜家禽別に分け、牛班、豚班、鶏班、犬班、小動物班の五班で実際問題になっている各種疾病に対する予防法及び環境問題など家畜衛生（家畜家禽の生命を脅かす種々の健康阻害因子を除去し、家畜家禽の生命の延長をはかり、かつ生産を向上せしめることが主な目的である。）の立場から独自に追求している。

また、両先生が兼務しておられる本学家畜診療所においても、一般外来動物の診療を中心とした各種の研究活動が行なわれている。

その他研究室の活動内容は、定例会、ゼミナール、年間行事として新入室員歓迎会、野球大会、収穫祭参加（文化展、模擬店）、親睦旅行、送別会などがある。

毎日の仕事としては、実験動物の飼育管理（当番制）卒業論文の手伝い（三年生以下）、診療業務の手伝い（希望者）が行われている。

本研究室の大きな特色として、その研究内容は言うまでもなく、室員各人が室員としての自覚と責任を持ち、一人一人がその運営に大きく貢献していること、また、本学厚木農場との行き来が他にも増して活発であることである。

このような多面活動において学生生活の充実を計り、室員の個性を引き出し、その個性を持ちより研究室独自の個性を持つという事に我々は目標を置いている。

十二月には新役員も発足し、室員はますますはりきっている。

18 石川　稔　肝蛭の発育環に関する研究　ミラキジウムからメタケルカリアまで　近江　渡辺（忠）

22 一坪　俊行　牛舎内飛来衛生害虫に対する防虫ランプの忌避効果について　近江　荻原

25 稲井　邦昭　茨城県小川町における養鶏の衛生態策について　近江　渡辺（忠）

41 荻野　福光　都市近郊の養鶏における糞尿処理について　近江　渡辺（忠）

42 押久保　信　サルファ剤過剰投与鶏の血液性状について　近江　渡辺（忠）

43 落合 健吾 低毒素有機隣剤が鶏の血液性状に及ぼす影響 近江 渡辺(忠)
63 絹川 通 豚肺虫の中間宿主に対する肉食昆虫オサムシの天敵利用について 近江 鈴木(伸)
66 草野 茂 小動物におけるX－Rayの造影法について 近江 渡辺(忠)
71 倉辺 雅光 ミクロフィラリア陰性犬の砒素剤投与後における一般臨床所見並びに血液性状 近江 渡辺(忠)
81 後藤 克己 豚舎内捕獲ネズミのトキソプラズマ抗体調査 近江 鈴木(伸)
83 斉藤 出 発癌物質MNNG投与家兎の一般臨床所見並びに血液性状について 近江 渡辺(忠)
89 桜井 茂 ホルスタイン種系去勢雄犢の各種疾病時における血液性状について 近江 渡辺(忠)
100 新堀 敦子 豚ジラミの生態に関する研究体表各部位被毛の電子顕微鏡的観察 近江 中村
113 芹沢 章徳 豚の発情前後における血液性状について 近江 鈴木(伸)
115 高倉 伸有 ミクロフィラリアに対する低毒素有機隣剤の駆除効果について 近江 渡辺(忠)
116 高野 広史 各種洗剤が犬の被毛に及ぼす影響について 近江 渡辺(忠)
120 高山 隆一 豚舎内飛来衛生害虫に対するランプの忌避効果について 近江 鈴木(伸)
124 館下哲次郎 細菌の構成物質並びに代謝産物に関する研究。特に有毒物質について 近江 渡辺(忠)
126 谷 栄之介 野外における家兎の耳疥癬の寄生状況について 近江 渡辺(忠)
146 新倉 喜一 騒音が犬の脈拍数、呼吸数、体温に及ぼす影響について 近江 渡辺(忠)
158 伴 光雄 都市近郊における畜産の環境汚染について 近江 渡辺(忠)
163 福島 和芳 野外における豚の内部寄生虫の寄生状況について 近江 鈴木(伸)
167 藤坂みどり マダガスカル産原猿類の腸管内寄生虫の解折と同定について 近藤 近江
171 細谷 浩 豚ジラミの生態に関する研究 近江 鈴木(伸)

173 牧口 誉詞 乳牛の妊娠時における尿性状について 近江 荻原
175 松井 稲子 神奈川県厚木市における酪農の衛生対策について 近江 荻原
179 丸野 兼俊 緬羊の体表各部位における被毛の電子顕微鏡的観察 近江 中村
198 山口 知美 土壌菌応用による家畜の糞尿処理の実態調査 近江 渡辺(忠)
199 山中 祐輔 家畜の糞尿処理に関する研究土壌菌による糞の乾燥性並びにアンモニア濃度の推移について 近江 渡辺(忠)
201 湯原日路志 家兎の実験的夾竹桃中毒における一般臨床所見並びに血液性状について 近江 渡辺(忠)
216 高橋 良行 ブロイラー生産農家におけるコクシジウムの発生状況について 近江 渡辺(忠)
241 座間 勝基 野外におけるトキソプラズマ抗体調査 近江 鈴木(伸)
233 山下 輝彦

畜産経営学研究室

本研究室は吉村教授をはじめ、桜井講師・石岡助手らの各先生と学生室員四年生二十九名、三年生三十名が一体となり活動しております。経営研究は主に、「経営経済学」であり、それとは別に、経営の社会学的研究が「経営社会学」、その技術的過程によるところの研究が「経営科学、さらに諸々の一連の経営に関する研究がそれぞれ独立して展開されているのである。

「経営学」などという経営自体を総合してうけとる研究は、すくなくとも学界には存在しない。この分野でいえることは、より実在に即して研究が進められていることが指摘できよう。そこで私達の研究のテーマというものを、我国(わがくに)の現状に即した方向から畜産経営の経済性というものを追求しようとするものであり、この現代のめまぐるしい社会の中にあって絶えず揺れ動く農業というものに対し、真正面から対応できる、そう言った使命感を持った連中の集まりなのです。

現在、研究効率を高めるために、酪農・肉牛・養鶏・養豚の四班に分かれ、それぞれが希望するところに、自由に選択し、各分野の研究・ゼミ等が行なわれています。またその他に毎年夏季休業中の研究活動として、各地方に出張し、農村地帯の現状や実製調査実習を行なって、その地域に於ける諸問題の追求・改善等などを畜産経営の本質的、立場より解明して研究の基礎を養い、また畜

産経営に貢献して行こうとするものであります。

以上、この様な研究活動はもちろんのこと、研究室行事としては、新入室員歓迎会・収穫祭・親睦旅行・畜友会ソフトボール大会参加とその他諸々のコンパ等、実に魅力にあふれるアットホーム的なところです。このような多面的な活動を通じて学生生活の充実を計り、今後もなお飛躍を目差す、研究室です。

どうぞ一・二年生の後輩諸君も一度、是非我が心の「畜産経営学研究室」に御訪問あれ。

7	荒井　康伸	養鶏経営における公害とその対策
20	居関　康定	乳雄牛肥育の技術と経営について
26	稲垣　正	家畜糞尿の有効利用に関する研究
29	今井　欽哉	庄内地方における養豚経営の現状と展望
34	内海　智博	都市近郊における肉牛経営の現状と問題点
36	大沢　年一	都市近郊における養豚経営の現状と展望
45	柿沼　広行	養豚の一貫経営とその経営分析
56	河原　正人	茨城県における酪農経営の現状と展望
58	菊地　隆	岩手県江刺地区における肉牛生産の経営設計に関する研究
80	小林　幹根	養豚経営における生産費の推移
85	斉藤　裕人	
86	坂上　孝哉	新潟県中越地方における養豚の現状と展望
99	新開　忠	愛媛県東予地区における肉牛生産の現状と展望
104	杉崎　正之	神奈川県における酪農の経営分析
149	枠田　亮一	静岡県西部地区における養鶏の現状と展望
160	日高　嘉徳	宮崎県における肉用子牛のせり市場出荷時の諸要素因の分析
168	布施　良一	EECにおける畜産物流通問題について
172	前川　隆之	酪農の管理作業の所得と労働生産性に及ぼす影響
186	宗藤　隆夫	酪農の現状分析と規模拡大における経営設計
188	村上　則良	山地における酪農経営設計に関する研究
191	本瀬　洋一	山地における酪農の経営的研究

195	安福　雅洋	兵庫県における都市近郊酪農の現状と展望
219	辻村　典久	家畜糞尿の共同処理施設に関する経営的研究
51	金沢　隆	都市近郊酪農の現状と将来
239	椎名　克文	牛肉の流通機構について
231	田中　和博	オーストラリアの牛肉生産と貿易について
239	福島　修一	開放鶏舎における管理環境について

畜産物利用学（肉）研究室

本研究室は、「肉研」と呼ばれ、教授の鬼原新之丞先生、講師の松岡昭善先生を両翼に、四年次生、十四名、三年次生二十名、専攻生、一名、で構成されている。

各人には、学究的態度の保持、研究室内に於いては、隔絶の無い雰囲気を醸成することを信条としている。

上級生と下級生の明確な区別はせずに、互いに切り合い睦じく実験、製造実習、問題の解明追究、遊戯に励んでいる。

上級者なるものは、微細にわたって肉の化学、各種実験方法を教示し、下級生なるものは、卒業論文の手伝い等、実験の潤滑油として活躍している。

問題解決には、昼夜を問わず追究するという室風が、我々の向学心を躍起させる。

また、十一月には新役員も決まり、各人が自覚を持って、研究室の運営にあたっている。

年間行事として

四月　新歓コンパ

十月　収穫祭出品物の製造及び販売

十一月　研修旅行

その他

年間を通じてのゼミナール

肉加工製造の手伝い、その販売

数々のコンパ

9	安藤　泰夫	豚肉の再凍結に関する研究。再凍結の回数が肉質に及ぼす影響について
74	小泉　徹	凍結、解凍の反復がハム・ソーセージに及ぼす影響について
108	鈴木　実	豚肉の再凍結に関する研究。再凍結処理前の解凍条件の差異が肉蛋白質に及ぼす影響
109	須藤　勝	豚肉の再凍結に関する研究。再凍結処理前の解凍条件の差異が肉質に及ぼす影響
112	瀬川　俊一	鶏肉ソーセージに関する研究
	松岡	
	鬼原	
	松岡	
	鬼原	

117 高橋 一郎 ブロイラー加熱肉の凍結保存中の変化に関する研究 鬼原

119 高山 志成 ホロホロ鳥肉に関する研究。育成時における筋肉成分含量について 鬼原 西脇

138 仲條 勝 鶏肉の凍結保存に関する研究 熟成の影響について 鬼原

139 中塚 勝 豚肉の塩漬に関する研究 松岡

150 橋本 義民 ホロホロ鳥肉再凍結保存中の変化に関する研究 鬼原

180 水野 利彦 豚肉の再凍結に関する研究。再凍結が肉蛋白質に及ぼす影響について 松岡

182 宮川 浩也 ブロイラー成育時に於ける筋肉成分含量の変化について 鬼原 西脇

194 安中 誠 包装および貯蔵と関連した加熱鶏肉の品質について 鬼原

237 河合 昭一 酸度調整ソーセージに関する研究 鬼原

畜産物利用学（乳）研究室

当研究室は室長の山中良忠助教授、古川徳講師の両先生のもとに普通室員（四年生十二名、三年生八名）準室員（三名）及び特別室員（四年生八名）で構成されています。

本研究室の主な活動は乳・乳製品及び卵・卵製品に関する理化学的、細菌学的研究であり、クリーンベンチ、ドラフター設備、ガスクロマトグラフィー、分光光度計等の完備された器具設備の利用により、一層高度な研究を可能にしています。

又、特に卵の分野への研究を進めこれら卵・卵製品の分析並びに各種蛋白素材と乳・乳製品への利用等の研究も行なわれています。

又、これらの研究を通じて室員相互の親睦を計り、人間形成を目的としていることも当研究室の特徴の一つであります。当研究室は昭和五十三年八月に総研の三階に引越し新たなる気持で室員一同実験に励んでいます。

本学卒業で乳業に従事している方々の親睦会である「楽乳会」の事務取り扱いに通じても先輩諸兄の御指導と御鞭撻をいただいております。

◎当研究室の主な行事

- ゼミナール
- 新入室員歓迎会
- 夏期乳製品製造実習

- 収穫祭への参加
- 秋の親睦旅行
- 卒業論文発表会
- 卒業生送別会

3 青木 守 アルデヒド及び糖の添加が乳製品の熱安定性に及ぼす影響 古川

4 青葉 誠 細菌による卵黄コレステロールの分解性について 山中

8 新谷 豊 原料牛乳中の低温細菌による蛋白質及び脂肪分解性について 古川

19 石川 雄二 粉乳の貯蔵によるリジン残基と糖との反応生成物について 古川

30 今井 淳子 加熱による液状卵中の酵素活性の低下 山中

31 今村 直人 各種蛋白素材の起泡性と乳化特性に関する研究 山中 古川

37 大沢 友雄 卵殻洗浄殺菌液が卵白の品質に及ぼす影響 山中

40 大野 隆司 原料牛乳中の低温細菌叢について 古川

52 兼田 勲雄 Grading and Packaging Centerにおける規格外卵の発生と液状卵の生産 山中

55 亀井 昭裕 液状卵の加熱保持による蛋白質の変化 山中

61 北島佐知子 乳製品様食品中の乳蛋白成分分布の比較研究 古川

122 武田 司 東京市場におけるパック詰鶏卵の流通実態 山中

164 藤井 俊二 大阪市場におけるパック詰鶏卵の流通実態 山中

203 吉井 雅夫 カゼイン中のアミノ酸とDNSCℓとの反応性について 古川

234 湯浅 美紀 環境騒音による産卵鶏の放卵の調査 伊藤 山中

昭和５３年度畜友会行事報告

５１年	１月２３日	昭和５３年度畜友会発足	
	２月１３日	昭和５２年度卒業生送別会（４号館共通実験室）	
	３月２０日	卒業生記念品贈呈	
	４月１３日	年間行事予定及び予算案作成	
	４月２１日	クラス役員選出 会計監査委員選出 選挙管理委員選出 規約改正委員選出	
	４月２２日	新入生歓迎会（４号館共通実験室）	
	５月　８日	役員補充（鈴木，小椋）	
	５月１４日	ソフトボール大会	
	５月１９日	役員補充（佐藤，緑川）	
	５月２２日 ～２３日	新入生オリエンテーションにおいて畜友会の説明 （富士農場）	
	６月 ～７月	夏季個人実習農場リスト作成	
	６月２０日	第１回講演会（講師　近江助教授） 「最近の乳牛の病気」	
	７月　３日	「ふじみの」編集委員会発足	
	８月　６日	１年生厚木農場実習において 収穫祭の説明会	
	１０月中	「ふじみの」原稿募集	
	１０月　３日	収穫祭本部開き （畜産学科第８６回収穫祭実行委員会発足）	
	１０月 ～１１月	収穫祭	
	１１月２８日	第２回講演会（講師　石島助教授） 「試験管ベビーとその周辺」 「商業ベースにのった牛の受精卵移植」	
	１１月３０日	「ふじみの」原稿募集〆切り	
	１２月１１日	昭和５３年度畜友会総会（４号館共通実験室）	

１２月１１日の畜友会総会において承認されました。

昭和５３年度畜友会会計報告

収入の部

前年度繰越金	291,813
新入生（212名×5,000円）	1,060,000
編入生（　8名×1,500円）	12,000
転科（　3名×3,750円）	11,250
利息	2,585
その他	12,500
	1,390,148

支出の部

	予算（円）	決算（円）	
入学辞退者返還費		75,000（15×5,000）	
卒業生送別会費	70,000	66,546	
卒業生記念品費	48,000	48,000	
ふじみの１７号印刷費	273,000	273,000	
１年生オリエンテーション費	20,000	19,760	
新入生歓迎会費	70,000	64,818	
講演会費	20,000	18,419	
スポーツ大会費	40,000	35,270	
実習農場紹介リスト費	5,000	1,810	
収穫祭説明会費	20,000	20,871	
収穫祭援助費	350,000	350,000	
コンパ援助費	40,000	26,200	
事務費	50,000	28,115	畜友会室補修費及び収穫祭援助費
予備費	229,063	31,044	
	1,235,063	1,058,853	

（収入総額）1,390,148円－（支出総額）1,058,853円＝331,295円

会計監査及び１２月１１日の畜友会総会において承認されました。

畜友会・会計　　大久保　日出世

東京農業大学畜産学科
〃畜友会〃規約

第一章　総　則

第一条　本会は東京農業大学畜友会と称す。

第二条　本会は東京農業大学在学生、教職員、及び卒業生をもって、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。

第三条　本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章　会　員

第四条　本会の会員は左記の三種をもって組織する。
一、正会員　二、特別会員
三、名誉会員

正会員は東京農業大学畜産学科在学生、特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。

第五条　会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章　役員及び機関

第六条　本会は左記の役員をおく。
一、委員長一名、副委員長二名、書記二名会計一名、会計補佐一名、渉外二名、企画三名、庶務二名
二、一年クラス委員四名、二年クラス委員四名、研究室委員八名
三、監査員四名

第七条　本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。

第八条　一、委員長、副委員長、書記、会計、渉外、企画、庶務は選挙によって、計十四名選出する。なお選挙規約は別に定める。
二、第六条第二項、第三項に定められた役員は一、二年二名、各研究室一名ずつ、監査委員は各学年一名ずつ選出する。
（なお、専攻生は、各研究室員の中に含まれる。）
三、欠員が生じた場合は、速やかに補充しなければならない。

第九条　役員の任期は原則として一年とする。

第十条　総会は正会員より構成され、本会の最高決議機関とする。

第十一条　一、総会は正会員の三分の一以上より成立する。

二、委任状は署名捺印（拇印を含む）を必要とし、議長に一任する。
三、委任状は総会に際し定足数に含まれる。
但し、委任状は議長委任とし、正会員総数の四分の一までとする。
四、委任状の検査は役員が行なう。
五、本条文は昭和四十三年十二月十八日をもって追加し即日効力を発する。

第十二条　定期総会は年一回十一月に召集する。
臨時総会は左記に該当した場合一ケ月以内に召集しなければならない。
一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。
二、役員の三分の二以上が必要と認めたとき。

第十三条　総会の開催は五日前に公示しなければならない。

第十四条　総会における議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を指名する。

第十五条　総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十六条　総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

第四章　業　務

第十七条　第六条第一項、第二項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、此の召集を委員長が行なう。

第十八条　本会の事業年度及び会計年度は十二月一日より翌年十一月末日までとする。

第十九条　本会は左記の業務を行なう。
一、会員親睦会
二、講習会及び研究発表会
三、見学調査
四、機関紙の発行
五、その他第二条に附帯する業務

第五章　会　計

第二十条　会費は年間一二五〇円とする。その納入は四年分一括し、入学金と同時に大学会計窓口を通じて納入のこと。

第二十一条　本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。寄附行為は認める。

第二十二条　納入金の払い戻しは行なわない。
但し入学取消しの場合はその限りではない。

第二十三条　決算報告は十月末日までに作成し公示する。
承認は定期総会において行なう。

第六章　監　査

第二十四条　本会の業務を円滑、正常化する為監査委員をおく。

第二十五条　監査委員は、前条の目的達成の為、年度末に会計監査を行なう。
監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。

第二十六条　監査委員は第六条第一項、第二項の役員の兼任は出来ない。

第七章　附　則

第二十七条　本規定解釈の疑義は、委員会において、最終的解釈する。

第二十八条　本規定の改正、及び追加は総会においておこなう。

第二十九条　本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

畜友会選挙規定

第一章　総　則

第一条　この規定は、畜友会役員の撰挙に関し、選挙が公明、且つ円滑に行なわれることを目的とする。

第二条　この規定は、畜友会規定第六条第一項に基づく役員の選挙に適用される。

第二章　選挙管理委員会

第三条　第一条の目的を達するために、東京農業大学畜友会選挙管理委員会を設置する。（以下本会又は単に撰挙管理委員会と呼ぶ。）

第四条　本会は、畜友会役員の選出に関して全ての権限を有する。

第五条　本会の委員は、各学年より一名ずつ選出し、委員長はその中より互撰する。ただし、これに畜友会役員、及び被選挙人は兼任できない。
ただし、各学年の在籍数の過半数によって選挙は成立し、三分の二以上の挙手二名以上の場合は挙手をもって最高級を当選とする。

第六条　本会の委員の任期は原則として、畜友会の

事業年度に準ずるものとする。

第七条　本会は選挙が公明且つ適正に行なわれるように常にあらゆる機会を通じて、公示及び選挙期日、方法、その他必要と認める事項を畜友会会員に周知させなければならない。

第八条　畜友会規定第十六条によって、畜友会役員の不信任を審査し、成立した場合には、本会は新たに役員の選挙を行なう。

第三章　選　挙

第九条　選挙はクラス、研究室の移動投票により行なう。

第十条　一、投票期日並びその期間は事業年度終了日以前の日時を原則とし、選挙管理委員会がこれを定める。
なお、不測の事態が生じた場合は、選挙管理委員会の決するところによる。
二、畜友会役員の不信任が成立した場合には、二週間以内に選挙を行なう。

第十一条　選挙管理委員会は投票日の十日前に公示しなければならない。

第十二条　選挙人、及び被選挙人は、畜友会正会員とする。

第十三条　撰挙は立候補制とし推薦者一名を必要とする。

第十四条　選挙管理委員会は立候補者に対して選挙宣伝の為、適切な援助を与えるものとする。

第十五条　投票に関しては左記の規定に基づいて行なう。
(イ)　投票は同一投票用紙において役員十四名については無記名で投票する。
(ロ)　投票は選挙管理委員会の定める用紙により行なう。
(ハ)　代理投票及び不在者投票は認めない。
(ニ)　投票箱は厳重に封鎖されたものを用い、投票終了後は封印きれ、開票時まで開くことはない。
(ホ)　投票場は選挙管理委員会が定める。

第十六条　開票は全投票終了後、ただちに行なう。

第十七条　開票は選挙管理委員会の定める場所において、立候補者またはその代理人の立合いのもとで行なう。

第十八条　左記の投票は無効とする。
(イ)　正規の投票用紙を用いていないもの。
(ロ)　立候補者以外の氏名を記入しているもの。
(ハ)　選挙管理委員会が不明と認めたもの。

第十九条　畜友会正会員の二分の一をもって最低投票数とし、これに満たないとき、選挙は無効とする。

第二十条　当選は有効投票数の上位の委員定数までの者とする。

第二十一条　立候補者が定数のときは信任投票を行ない有効投票数の過半数をもって当選とする。

第二十二条　選挙管理委員会は開票後二日以内に適当な方法をもって、当選者を公表しなければならない。

第二十三条　選挙管理委員会は選挙記録を作成し、一年以上保管する。

第二十四条　選挙管理委員会は畜友会会員に選挙記録の提示を求められた時には、いかなる事情があってもこれに応じなければならない。

第四章　予算及び監査

第二十五条　畜友会は選挙管理委員会の必要とする経費を支出しなければならない。

第二十六条　選挙管理委員会は年度末に畜友会会計監査委員の監査をうける。

第五章　改　正

第二十七条　本規定は畜友会総会において三分の二以上の賛成をもって成立する。

第二十八条　本規定に疑義が生じた時は、選挙管理委員会が最終的に解釈する。

第二十九条　本規定は昭和五十年四月一日より施行する。

編集部では〝ふじみの〟第十九号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとする為にも、名誉会員、特別会員、学生多数の御協力をお願いします。

記

募集期間　五十四年九月～十一月下旬

要　項　○論文、随筆、紀行文、主張
　　四〇〇字詰～十枚以内
　　○写真カット、は随意
　　○表紙図案、三色以内

宛　名　東京都世田谷区桜丘一－一－一
　　東京農業大学畜産学科内
　　畜　友　会
　　ふじみの編集委員会行

発行日　昭和五十五年一月予定

応募原稿は一切お返し致しません。

畜友会〝ふじみの〟編集委員会
TEL（四二〇）二一三一(呼)

編集後記

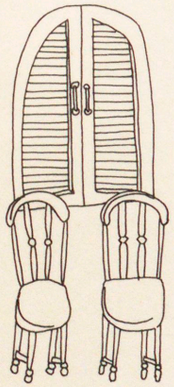
〝ふじみの〟発行も18回目を迎え、今年で満18才になりました。我々、委員一同は皆様に十分満足戴けるよう、かつ充実した内容のものにしようと、各方面に原稿を募集致しました。

編集していてこんなに楽しい気分にさせてくれたのもこんなにもバラエティーに富んだ原稿をいただけたおかげです。

これからも是非、我々畜友会会員の足跡を残していく為にも、皆さんの積極的な参加を熱望しています。

最後に、この〝ふじみの〟の為に御協力いただいた諸先生ならびに会員諸氏に深く感謝致します。

本当にありがとうございました。



編集委員一同

昭和54年1月　日発行　発行所　東京都世田谷区桜丘1-1-1
東京農業大学畜友会
電話（420）2131(呼)

〝ふじみの〟第18号

編集責任者　宇野　仰
発行者　榎本一弥

印刷所　世田谷区経堂1-6-13
エルデ・タイプ社
電話（429）1067